



2008

長崎県雲仙市教育委員会

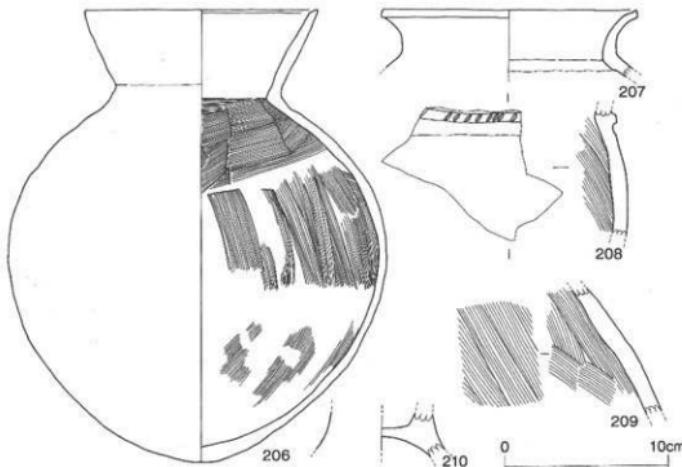
雲仙市文化財調査報告書 第3集

ryuo  
**龍王遺跡Ⅲ**

(縄文時代・古墳時代編)

-国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査-





一出土遺物一

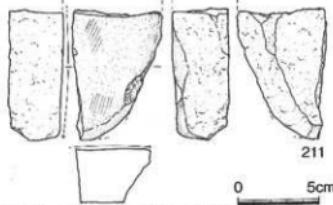
第85図 拡張区SB-1サブトレ出土土器 (1/3)

壺他（第85図）：206は直口壺である。接合によりほぼ完形にまで復元できた。底部は丸底。胴部は球形で、最大径は23.1cmを測り胴部中位に位置する。頸部は縮まりがよく、口縁部は斜め上に長く伸びている。口唇部端はつまみ上げたように尖っている。胴部外面はナデ、内面は上位に斜位のハケ、中位から下は綫位のハケを施している。口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えている。色調が白っぽく、外面の一部分に被熱による黒色化がみられる。207は壺の口縁部から頸部破片資料である。頸部は縮まりが悪く、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反している。口唇部は断面方形で、端部を上につまみ上げ内面に稜を作る。内・外面ともに横位のナデを施している。208は突帯が張り付けられた胴部片である。細めの突帯には爪形文が施されている。外面は突帯の下は横位のナデ、内面はナデ後に斜位のハケを行っている。209は胴部上位の破片資料である。傾きからかなり大きいものになると見える。外面は斜位のハケ、内面は綫位のハケをナデ消し、上から横位のハケを行っている。210は台付壺の壺と脚台部の接合部分の破片である。器面がかなり摩滅しており調整が分かりづらいが、内・外面ともに横位のナデを施しているようだ。いずれも胎土に角閃石が多く含まれているため在地系の可能性が高い。

(小野)

砥石（第86図）：211は粗い砂岩製の砥石である。長さ7.0cm、幅6.5cm、厚さ3.4cmを測るが、大部分を欠損するため全体の形状は不明である。正面及び右側面の正面側以外は割れ面であり、石材本來の粗い礫面となっているが、右側縁の形状はほぼ当初のものを残していると考えられる。正面はほぼフラットでかなり研磨されている。右側面や裏面の一部は赤色化しており、被熱の痕跡とも考えられる。

これまでにも住居跡出土の砥石を数点紹介しているが、いずれも研磨された面が湾曲しているものばかりであったが、当資料はほぼフラットな研磨面をもっており、用途の違いが想定される。

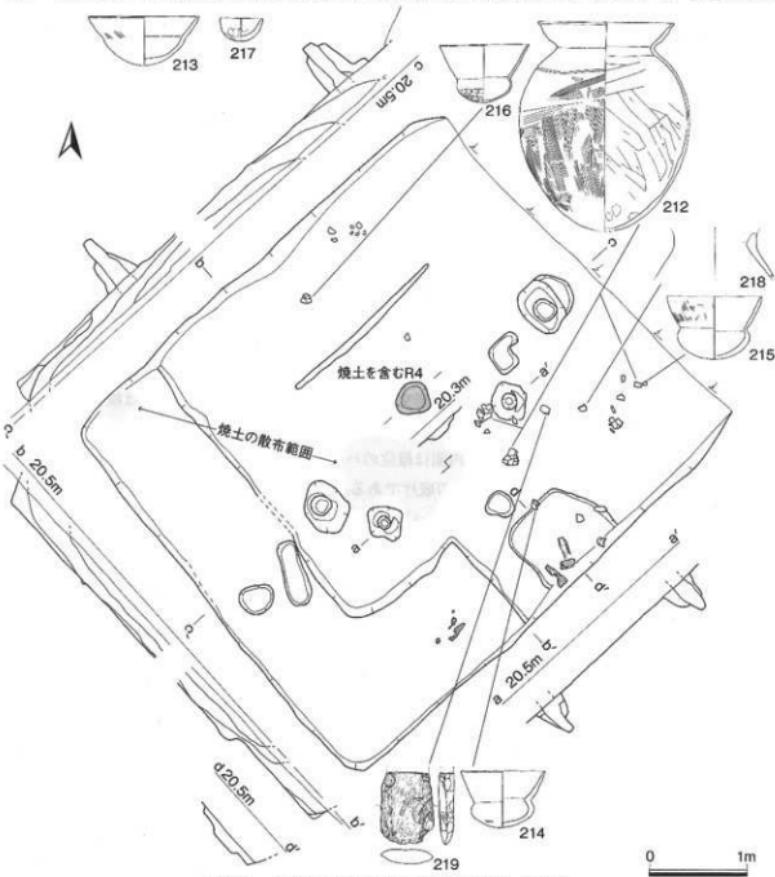


(辻田) 第86図 拡張区SB-1出土石器 (砥石) (1/3)

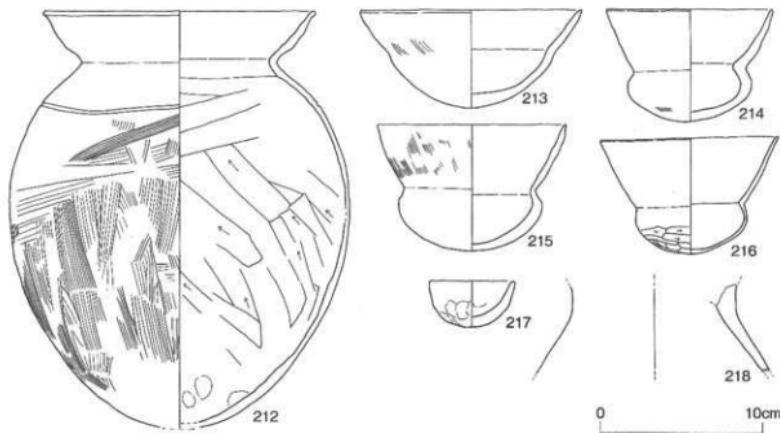
⑫ 5区SB-1 (第87図～第89図、図版5・図版16～17・図版29)

一検出状況

これまで紹介してきた住居群から東側へ約200m程離れた地点で検出されている。平面形状は長方形で、北東側の1辺が削平されているものの、土層堆積の状況からはほぼ全体が検出できているものと考えられる。長軸5.5m～6m、短軸4.5mを測る。立ち上がりは約80cmほどが検出されており、南側コーナーには幅1m、高さ20cm程のベッド状の段差を持つ。床面は硬化しているが、張り床を行ったような痕跡は見られない。床面には長軸方向に2対の柱穴が検出されるが、サイズの大きいほうは住居跡の軸の中心を通り、もう1対は東南側に50cm程ずれる。それたほうの1対は検出時及び半歳時に柱を倒し抜き取ったような土層堆積（a-a'・左側柱穴。右側の柱穴も土層図には見えないが、北側に倒し引き抜いたような土層堆積が見られる。）を確認しており、住居建設当初の柱穴と考えられる。もう1対の軸の中心を通るものは建替え後のものと考えられ、軸が動いていることから、住居を北西



第87図 5区SB-1実測図及び遺物出土状況 (1/50)



第88図 5区SB-1出土遺物(甕・小型丸底土器)(1/3)

方向と北東方向に拡張していることも予想される。また、当初の一対の柱穴を軸にして南東側を折り返した位置には床面に細い溝状の遺構が見られ、当初の住居跡の幅を示すものであろうか。床面に見られる網掛けは焼土の散布範囲を示すものであるが、最も濃いものは浅い掘り込みを伴うことから、炉跡と考えられるが、底面には焼土が確認できず、覆土中に焼土粒が確認できるのみである。遺物は床面上からの出土で、住居埋土中はほとんど見られない。住居の廃棄時に内部の片づけを行っていると考えられる。この周囲では、布留式段階の住居が検出(2006竹中)されており、当時は住居群が広がっていたと考えられる。

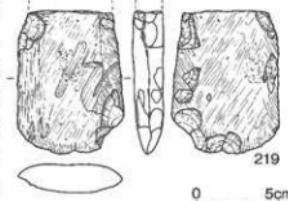
(辻田)

#### 一出土遺物

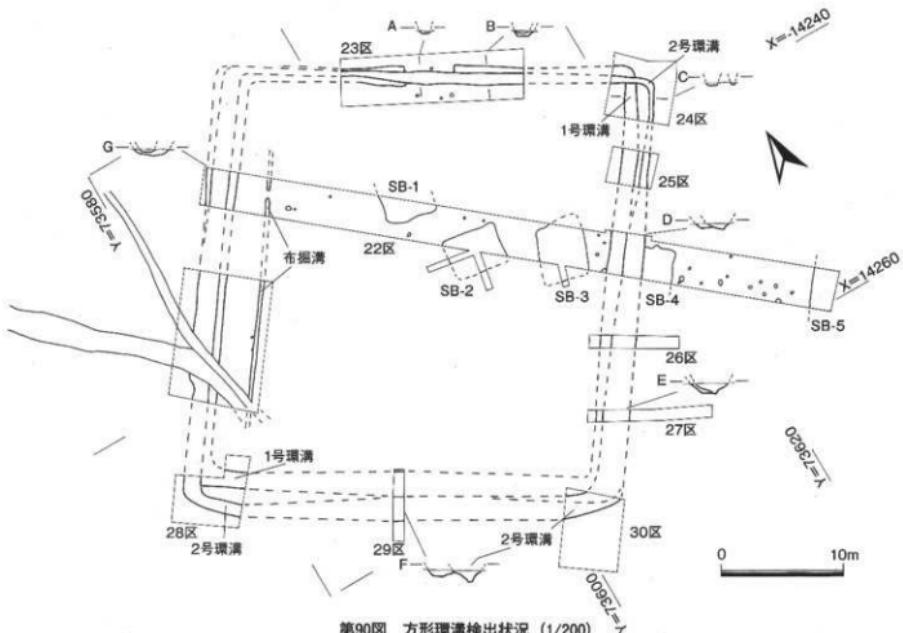
**甕他** (第88図) : 212は残存率45%の中型甕である。底部は丸底、胴部最大径は肩部に位置している。頸部は縮まりがよく、口縁部はやや波打ちながら中央が肥厚し、若干内湾する。口縁部端は外側に丸くおさめている。胴部外面は肩に1条のしっかりとした沈線文が施され、その下に横位のハケを行っている。胴部中位から下は縦位のハケである。内面は強い縦位のケズリで非常に薄く仕上がっており、底部には指頭圧痕が明瞭に残っている。口縁部は内・外面ともに横位のナデで整えている。器面は黒くなっている火を受けているようだ。形状や調整は布留系の特徴がよく出ている。213~216は小型丸底土器である。底部は丸底、口縁部は若干内湾しており、口縁部端は丸くおさめる。全てミガキできれいに仕上げている。213は残存率50%。頸部の縮まりが甘く、内・外面ともに丁寧な横位のナデである。214~216はいずれも接合によりほぼ完形にまで復元できた。頸部は縮まっており、口縁部は長い。内・外面ともに丁寧な横位のナデである。215は口縁部に縦位のハケを施している。216は外面底部にケズリが見られる。217はミニチュアの浅鉢である。残存率は70%。ナデと指頭圧痕が内・外面ともに明瞭に残っているため、手捏ねの鉢であることが分かる。218は台付壺の脚台部破片資料である。径が広く、上に付く甕は大きくなるだろう。器壁は薄くなる。内・外面ともに横位のナデを施している。(小野)

**石斧** (第89図) : 219は在地の角閃石安山岩製で薄く仕上げられている。両側縁表裏面には製作当初の剥離面が残る。基部側は折れにより欠損する。

(辻田)



第89図 5区SB-1出土石器(石斧)(1/3)



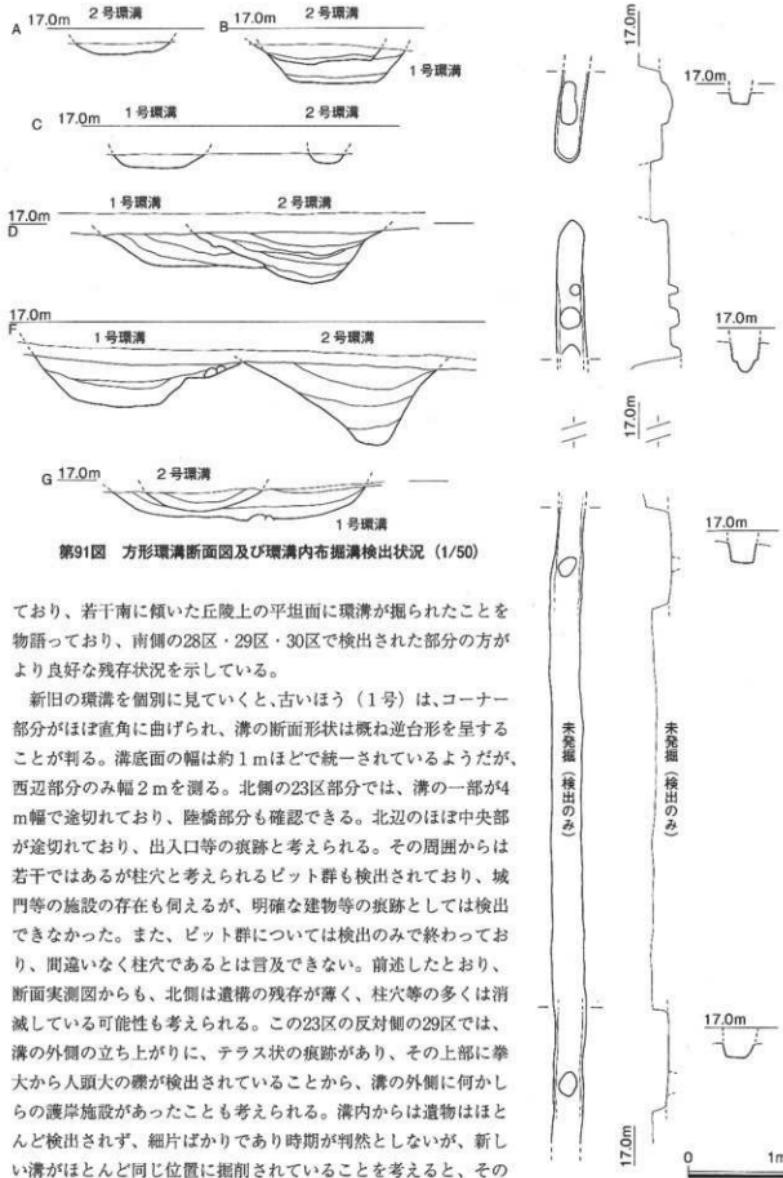
第90図 方形環溝検出状況 (1/200)

#### 第4節 古墳時代方形環溝（豪族居館）（第90図～第123図、図版6・図版17～24）

##### 一検出状況

前節で紹介した弥生時代～古墳時代にかけての住居群のすぐ北側で検出されている。これまでにも述べたが、検出された地点は本来盛土による保存地域であったが、工事による掘削において、遺構が露出してしまった箇所が見られた。事業者側との協議により、遺構の露出した部分については、状況が把握できる程度に遺構の検出を行い、基本的には、確認後盛土による保存を行うこととした。また、一部は内容確認のために部分的に遺構の掘削を行うこととした。

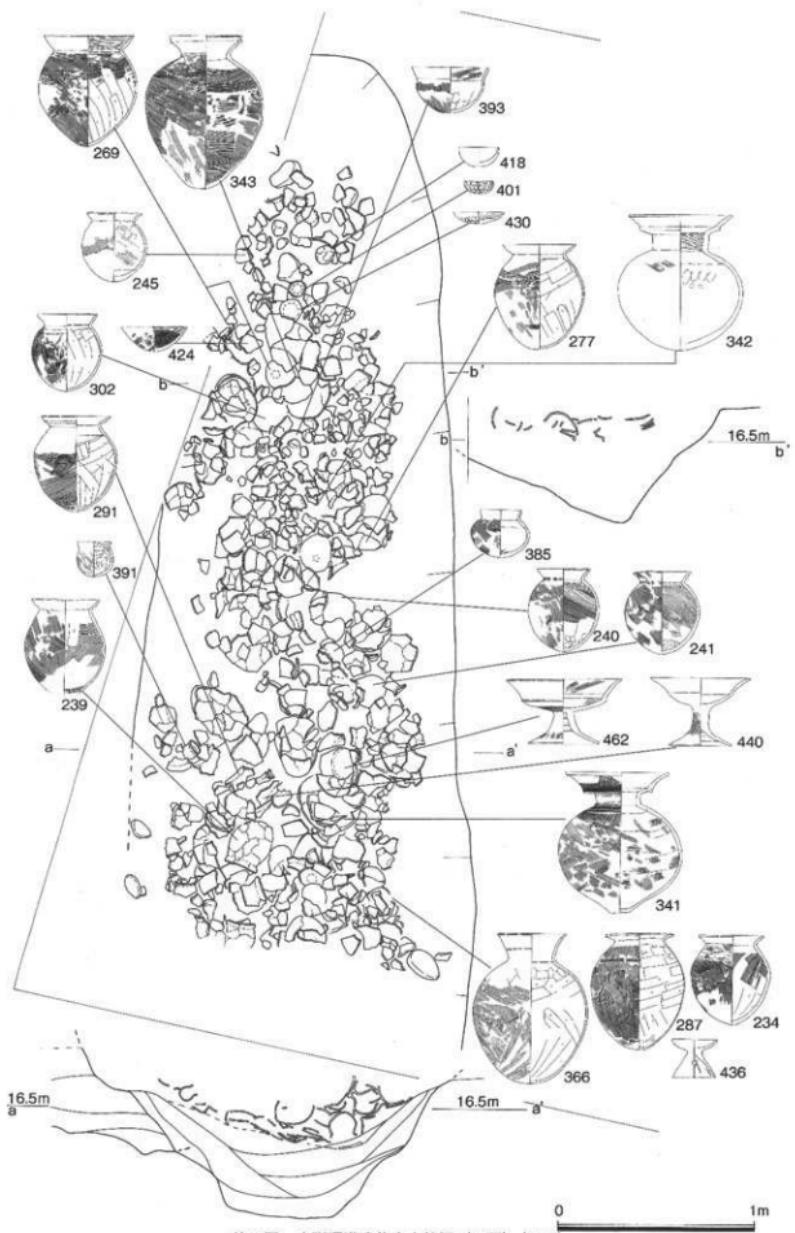
第90図北側のトレンチ（23区・24区）部分については、工事による掘削の段階でしっかりといた遺構の形状が認識出来るほど露出してしまっていた。当初は部分的な遺構の検出であったため、地点ごとに住居群や構造遺構が検出されているものと考えたが、トレンチを増やすごとに、それぞれの遺構が同一のものであることが判明した。上第90図を見ても判るように、すべての部分を検出しているわけではないので、厳密には言えないが、ほぼ間違いなく方形に巡る溝（環溝）が検出されている。しかも、環溝はほぼ同じ位置に2条検出されており、平面的には23区・24区を見れば一目瞭然で、切り合い関係も明瞭である。今報告では大量に遺物の出土した新しい環溝（2号）について主に報告を行っている。検出された環溝の幅は最大で約2.5m、深さは0.9mほどである。正確には方形と言えず、若干菱形に歪んでおり、一辺約34mを測る。真北からは約35度東へ軸がずれている。検出された場所は遺跡の広がる丘陵上部の平坦面に位置するが、環溝の検出された部分から北側に向かって本来は若干標高が高くなっていたものと想定され、遺構の北側部分は水田造成時にかなりの削平を受けていることが考えられる。そのことは第91図の環溝断面図や次頁の第92図断面図においても顕著に見受けられ、検出時の溝幅や深さに大きな差が見られる。また、遺構底面の標高についても南側のほうが低くなっ



第91図 方形環溝断面図及び環溝内壁掘溝検出状況 (1/50)

ており、若干南に傾いた丘陵上の平坦面に環溝が掘られたことを物語っており、南側の28区・29区・30区で検出された部分の方がより良好な残存状況を示している。

新旧の環溝を個別に見ていくと、古いほう（1号）は、コーナー部分がほぼ直角に曲げられ、溝の断面形状は概ね逆台形を呈することが判る。溝底面の幅は約1mほどで統一されているようだが、西辺部分のみ幅2mを測る。北側の23区部分では、溝の一部が4m幅で途切れており、陸橋部分も確認できる。北辺のはば中央部が途切れており、出入口等の痕跡と考えられる。その周囲からは若干ではあるが柱穴と考えられるピット群も検出されており、城門等の施設の存在も伺えるが、明確な建物等の痕跡としては検出できなかった。また、ピット群については検出のみで終わっており、間違いなく柱穴であるとは言及できない。前述したとおり、断面実測図からも、北側は遺構の残存が薄く、柱穴等の多くは消滅している可能性も考えられる。この23区の反対側の29区では、溝の外側の立ち上がりに、テラス状の痕跡があり、その上部に拳大から人頭大の礫が検出されていることから、溝の外側に何かしらの護岸施設があったことも考えられる。溝内からは遺物はほとんど検出されず、細片ばかりであり時期が判然としないが、新しい溝がほとんど同じ位置に掘削されていることを考えると、その



第92図 方形環溝遺物出土状況（30区）(1/25)

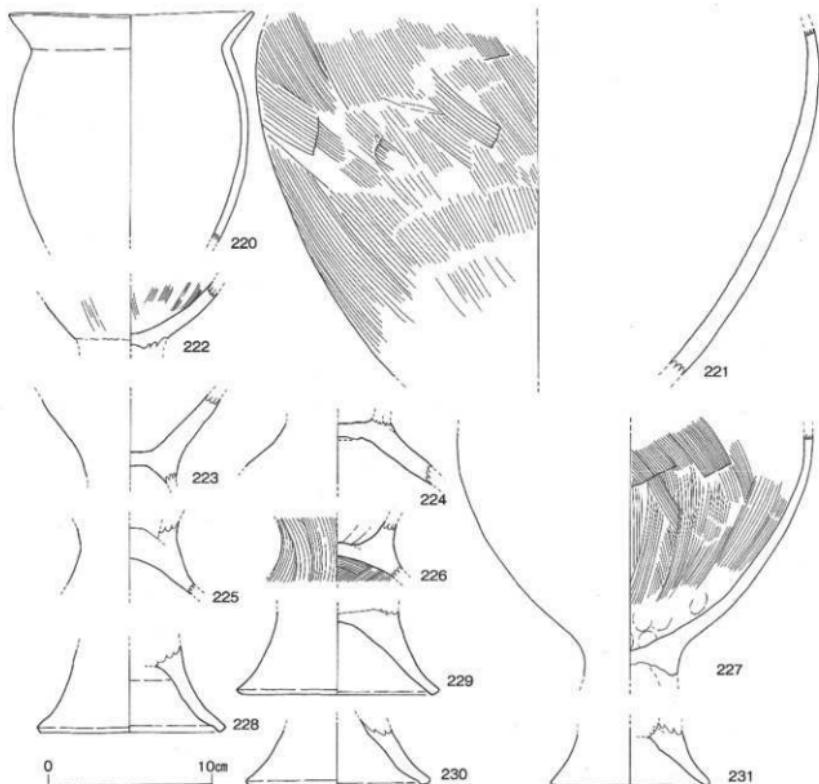
直前までのものと考えてさしつかえないであろう。また、土層の堆積状況からは数層に細分が可能であるが、内部の土層は、環溝が掘削された黄色の粘質土が混ざりこんでいるのか、ほぼ黒色の新しい環溝に比べると非常に明るく、黄色っぽい土色となる。さらに、炭化物や焼土粒等も混入している部分が見られ、最も下層に堆積している土層を除くと、人為的に入れ込まれた土層の可能性もある。新しい環溝を建設する際に、近隣の土砂による埋め立てが行われたことも考えられる。ただし、29区の土層堆積はその他の部分と大きく異なり、黒色の粘質土が堆積しており、発掘による掘削も粘質土が掘り具に張り付き苦労した。おそらく常に水が溜まつたような状況であったと予想される。溝の断面図からも、標高の低い南側に雨水等の流れ込みがあったであろうことは想像に容易い。

新しい方の環溝（2号）は、南側の一辺が古い環溝に比べると張り出すような形状となっており、南側に2mほど拡張された格好となっている。また、発掘した範囲内では陸橋部分のような途切れた部分は確認できていない。断面形状も古い環溝と異なり、第91図D・E・Fの断面図から見ると、環溝内側の溝断面はかなりならかな立ち上がりの様子であるが、外側はかなり急角度で立ち上がっていている。検出面での溝の幅の大きな違いは、溝の断面形状に起因する。また、断面図Cや同じくFなどを見ると、新しいほうの環溝は溝の最深部を若干深く掘りくぼめていると考えられ、24区などは辛うじてその最深部が残存しているものである。この新しい環溝からは大量の遺物が検出（22区・26区・27区・29区・30区）されているが、最深部付近では非常に少なく、ほとんどが検出面に近い部分で検出されている。特に30区では折り重なるような検出状況（第92図）が見られる。30区はコーナーの屈曲部の検出には至らなかったが、屈曲部に続く部分の発掘を行った。溝底面から50cm程上部において大量の古墳時代初頭の土器が検出されている。ほぼ完形に復元できるものも含まれており、一括で廃棄されたものと考えられる。土器の集中出土部分より下位の土層については数層に細分可能であるが、人為的に埋められたものではなく、比較的時間かけて堆積したものか。いずれのトレンチでも検出面において遺物が集中して見られることから、新しい環溝は、掘削後ある程度時間が経過し、溝底部に土砂がある程度埋まつた状態となった後、一気に埋められ廃棄されたものと考えられる。第92図に検出状況と溝断面図及び主な出土遺物について掲載している。平面図や断面図、また巻頭の図版などからも大量の土器片の出土が判るであろう。出土遺物については後述するが、概ね庄内並行期から布留の古相の時期と考えている。

環溝内部や周辺では方形の住居群やピット群、溝状遺構が検出されている。第91図に環溝内部に検出された布掘の溝状遺構実測図を掲載している。溝は環溝西辺の講と並行して検出され、その距離は約4mである。幅40cm、深さ30cmほどであり、ほぼ垂直に掘り込まれている。一部で途切れている部分がみられる。方形環溝に密接に関連のある遺構と考えられ、新旧いすれかの環溝に伴うものと考えられる。現時点ではどちらに伴うものか判断は難しいが、同様の遺構が検出されている大分県小迫辻原遺跡では陸橋を持つ環溝に伴っており、龍王遺跡のものも陸橋をもつ古い環溝に伴うものであろうか。また、方形環溝西側からのがびる2本の溝との切り合い関係が見られるが、細い溝は古代の遺物が検出されており、後出するものであり、検出時も色調の差ではっきりと判断が出来た。もう一本の溝は検出時の色調の差では判断が難しく、図面上は後出するものとしており、前回の報告（竹中2006）でもそう判断している。しかしながら、溝の断面構造や少量の出土遺物から考えると先行する可能性も考えられ、本来は前節で紹介している、弥生時代の住居群と関わる溝と考えている。次頁以降は方形環溝（2号）30区より出土した遺物を紹介する。  
(辻田)

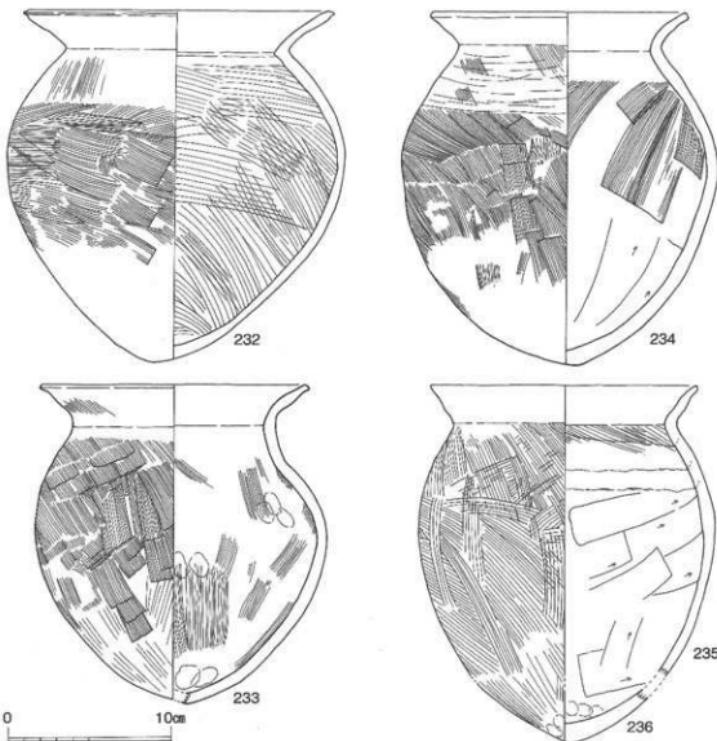
#### 【参考文献】

- 竹中哲朗・織田健吾 2006 『龍王遺跡(倉地川古墳)』雲仙市文化財調査報告書(概報)第1集 長崎県雲仙市教育委員会  
田中裕介・土居和幸・清水宗昭 1999 『小迫辻原遺跡I A・B・C・D区編』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘  
調査報告書10 大分県教育委員会



一出土遺物—

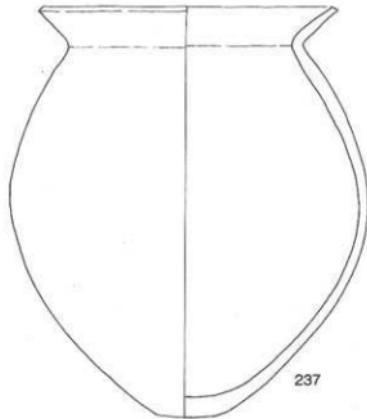
台付甕（第93図、図版12）：220は甕部分の破片資料で、小型である。胴部は張りを持ち、頸部ですばり、口縁部が開く。器面が磨耗しているため調整は判然としない。221は甕棺の胴部破片である。すんぐりした倒卵形で、最大径は中位に位置している。外面は斜位のハケを施す。内面の器面には鉄分の付着と部分的な剥落があり調整が確認しづらくなっている。222～226は甕底部と脚台部とを接合する部分の破片資料である。222は外面が縦位のハケ後横位のナデを施している。内面は横位のナデ後斜位のハケで底部には指頭圧痕を施している。223は器壁が若干赤色化している。226は外面が横位のナデ後縦位のハケ、甕底部内面はケズリ後横位のナデと指頭圧痕を施す。台裾部内面は斜位のハケ後にナデを施している。外面には赤色化が見られる。227は胴部最大径から甕底部と脚台部の接合部分が残存している。大型の台付甕になるだろう。胴部外面は剥落しており分からぬ。接合部分には接合する際に横位のナデで整えた痕跡が残る。内面は底部に指頭圧痕が明瞭に残る。その上に縦位と斜位のハケを施す。228～231は脚台部の破片資料である。全て「ハ」の字状に開き、内・外ともに横位のナデを施している。228は内面が真っ黒くなつておりあまり火を受けていない。いずれも胎土に角閃石が多く含まれているため在地系の台付甕であることが分かる。231のみ裾端部が丸くおさめられている。



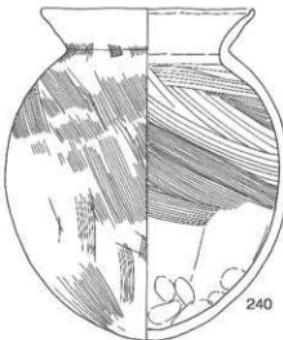
第94図 方形環溝出土土器(壺①) (1/3)

壺(第94図～第107図、図版17～21)：第94図は底部が尖底で、胴部最大径は中位より若干上に位置しているなどそれぞれ類似している点が多く見られる。232は頸部の縒まりがよい。口縁部は「く」の字状を呈し外反して、外側に大きく開いている。口唇部端は上面が平坦で、外方に小さく突出する。口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えている。胴部外面は縦位のハケ、中位は横位のハケ、底部付近はケズリ後にミガキを施している。内面は目が粗い横方向斜位のハケを施す。233は形状がいびつである。肩部分がすぼまっており、頸部は縒まりが甘く、口縁部は中央が肥厚しながら外反。口唇部端はきれいに面取りされている。外面は頸部までが黒くなっている部分が多く、口縁部には斜位のハケ、胴部が横位のナデ後横位のハケ、底部付近が目の粗い斜位のハケを施す。内面は口縁部が横位のナデ、胴部は横位のナデ後斜位・縦位のハケを行い、底部には指頭圧痕が残っている。234は頸部が縒まっている。口縁部は外反しており、口唇部端はきれいに面取りされ、断面方形である。胴部上位より下は器面が黒くなっている。外面は口縁部が横位のハケ後横位のナデ、胴部が横位のナデ、中位辺りから、横位のナデ後に斜位のハケ、底部付近は斜位のハケ後に縦位のナデを行っている。内面は口縁部が横位のハケ後横位のナデ、胴部上位が横位のナデ後に斜位のハケ、下の方が縦位のケズリとナデを行っている。235・236は接合できなかったが、特徴などから同一個体であると考える。内面には輪積み痕が著しく残っており、割れている部分と輪積み痕が一致しているため、作る際の成形が甘かったのだろう。口縁部は若干口唇部で外反し外側に開いており、「く」の字状である。胴部は

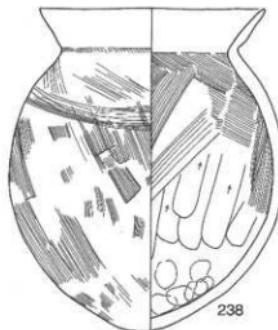
肩が張らず、あまり丸みを帯びずスリムな形状をしている。外面は口縁部が横位のナデ、頸部が横位のハケ後横位のナデ、胴部が斜位のハケ後に縦位のハケで網の目の様になっており、底部付近はややナデ消しを施す。内面は口縁部が横位のナデ、胴部上位には作る際の接合面が残り、底部は回転を利用したケズリを施している。底部のみ赤色化している。第95図も比較的の残存率がよい中型の甕である。**237**は残存率90%。全体が橙色である。底部は小さい平底、胴部は最大径が器高の中位にあり、なで肩である。頸部は締まりがよく、口縁部は短く、若干外反し、頸部から口縁部に向かって「く」の字状をなす。内・外面ともに摩滅が激しく判然としないが、内面に若干ハケの痕跡が残る。**238**は残存率60%。内面には赤色粒子が多く見られる。底部は尖底気味の丸底である。胴部は卵型で、頸部は締まりがよい。口縁部は下の方が肥厚しながら外反し、口唇部端で丸くおさめている。外面は口縁部が横位のハケ後横位のナデ、頸部が横位のハケ後に横位のナデと、斜位のハケを施している。胴部は横位のナデ後斜位のハケを行い、胴部上位は横位のハケ後に横位のナデを行っている。内面は、口縁部が横位のナデ、胴部が横位のナデ後斜位のハケ、胴部中位がケズリを行って、底部は指頭圧痕である。**239**は残存率85%。底部は欠損しているが、おそらく丸底を呈す。胴部はナデ肩で、頸部は締まりがやや甘く、口縁部は内溝する。口唇部端は外方につまみだしている。口縁部は水平ではない。口縁部は内・外面ともに横位のナデである。胴部外面は斜位のハケと斜位のナデが施されている。内面は、底部から口縁部に向かって斜位のハケが施され、一部分にケズリが確認できるためケズリ後にハケを行ったと思われる。**240**は残存率50%。胎土には角閃石が多く含まれる。底部は丸底を呈し、胴部は若干肩の部分が張るが、丸くなっている。頸部は締まりがよい。口縁部は外反しており、口唇部で外面に膨らみを持ち、内方につまみ入れて稜を作っている。外面は口縁部・頸部が横位のナデ後縦位のハケ、胴部が斜位のハケ後ナデ、部分的にナデ消しである。内面は口縁部が横位のナデ、胴部が外面より太めのハケで、底部付近が下から上に向かっての縦位のハケ、底部が指頭圧痕である。図示はしていないが胴部中心辺りに穿孔らしきものが1ヶ所確認できる。**241**は残存率95%。胴部・底部は丸くなっている。頸部は締まりがやや甘い。口縁部は「く」の字状に外反しており、水平にできていない。全体的に器面が白味がかったり、焼きが甘いようである。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施し、頸部から胴部内面は縦位のハケで、その上からナデを行っている。胴部内面は下から上へ太目のハケで縦位のハケを行い、底部は指頭圧痕である。**242**は残存率50%。底部は欠損しているがおそらく丸底を呈する。頸部は締まりが甘く、胴部は球体である。口縁部は若干外反しており、口唇部端は内方につまみいれて稜を作っている。胴部中位が赤色化している。口縁部は内・外面ともに横位のナデである。胴部外面は斜位のハケ後に横位のナデを行っており、部分的にナデ消している。内面は斜位のハケと斜位のナデである。第96図は残存率がよく第94・95図よりも一回り小さい甕を図示している。**243**は残存率45%。底部は欠損しているがおそらく丸底になるだろう。胴部は球形で、頸部は締まりがよい。口縁部は波打ちながら「く」の字に外反し、口唇部端は上面をきれいに面取りして断面方形で、外方につまみだしている。口縁部は内・外面ともに横位のナデである。外面は頸部が横位のケズリ、胴部は斜位のハケで、ハケに沿って上からナデで消されている。内面は横位と斜位のハケを施している。**244**は残存率100%で、ヒビも入らない完形品である。底部が丸底、胴部は丸く、頸部は締まりがよい。口縁部はわずかに波打ちながら外反し、大きく外側に開いている。口唇部端は丸くおさめている。口縁部は丁寧な横位のナデである。胴部外面は上位が横位のハケ後に横位のナデ、中位から下は斜位のハケを施す。胴部内面は縦位のハケを施す。**245**は残存率90%。底部は丸底。胴部は球形を呈している。最大径は見る場所によって違うので、球形だがかなり雑な作りでいびつにできていることが分かる。頸部は締まりが甘く、口縁部は波打ちながら外反している。口縁端部は丸く



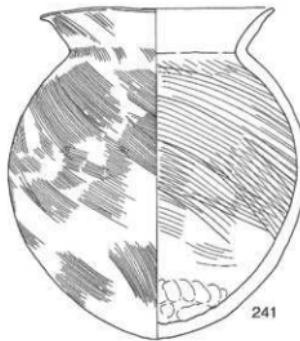
237



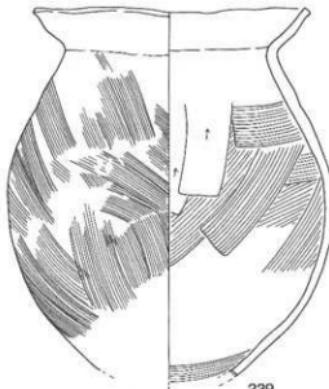
240



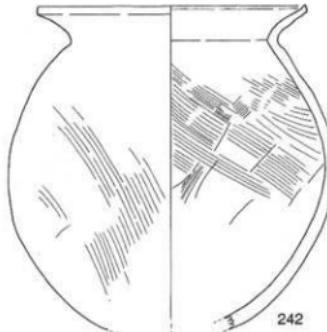
238



241



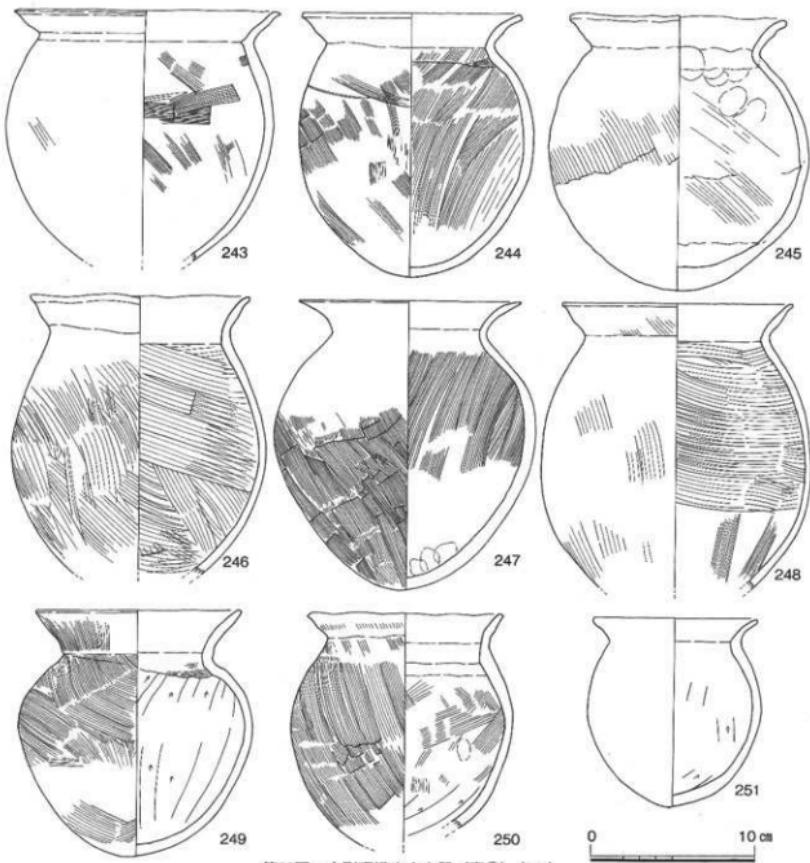
239



242

0 10 cm

第95図 方形環溝出土土器 (表②) (1/3)

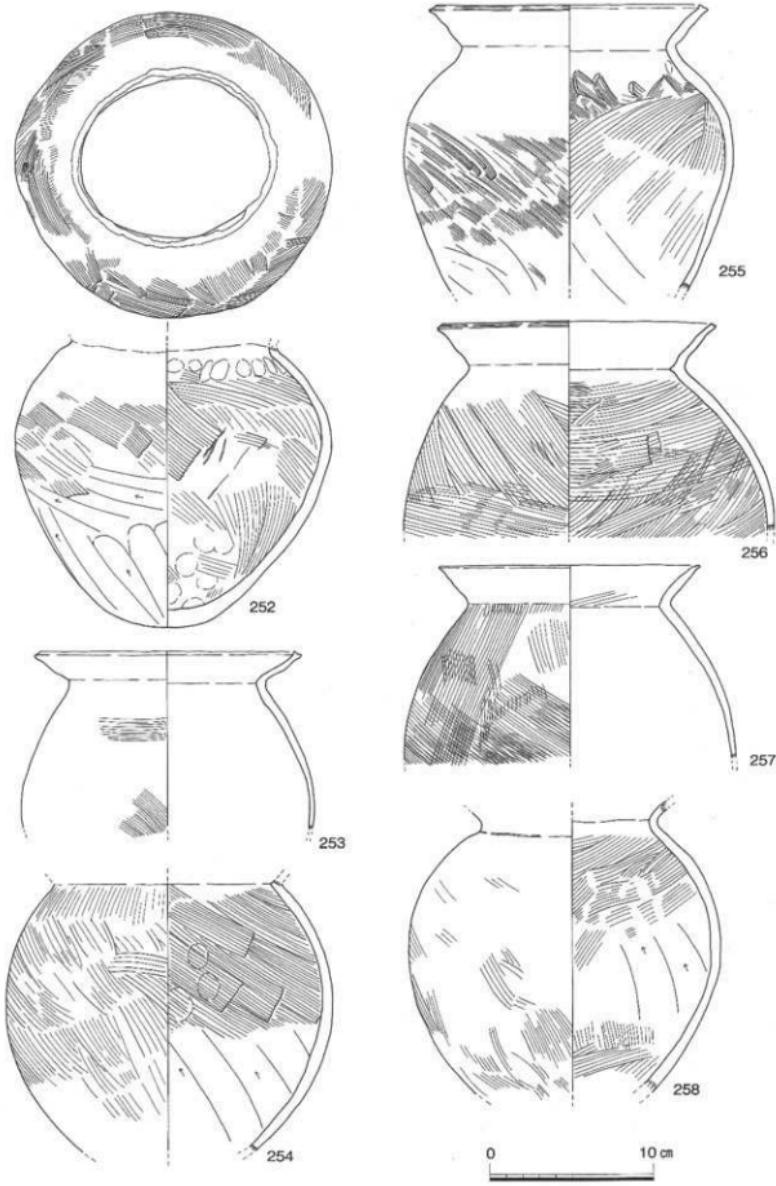


第96図 方形環溝出土土器(施③)(1/3)

おさめている。口縁部は水平にはできておらず手捏ねのようにつまみ上げて作ったままで、あまり成形されていない。胴部内面には接合痕が明瞭に残る。口縁部は内・外面ともに横位のナデで整えている。胴部外面は器面が磨耗しているため分かりにくくなっている。内面には斜位のハケ後にナデ、その後に指頭圧痕を施している。246は底部が残存しておらず不明である。胴部はなで肩でスリムな形状を呈す。口縁部は中央が肥厚しながら若干外反しており、口唇部端は外側で丸くおさめている。口縁部は水平にはできておらず波打っている。胴部最大径と口径にあまり差がなく、胴部外面は不定方向への乱雑なハケである。内面が横位のナデ後斜位のハケを施している。口縁部は内・外面ともに横位のナデである。247は残存率70%。口縁部が一部分しか残存していない。底部は丸底を呈す。胴部は最大径が肩にあり、頸部は締まりがよいが外面には稜が残っていない。口縁部は上方を肥厚させ、非常に外反する。口唇部端は綺麗に面取りされており、先を尖らせている。外面は口縁部から胴部上

位が横位のナデ、胴部中位から下が縦位のハケである。部分的にはナデと指頭圧痕がある。内面は口縁部と頸部は横位のナデ、胴部は縦位のハケ後縦位のナデ・部分的にナデ消し、底部には指頭圧痕が施されている。**248**は底部が欠損しており不明。胴部はなで肩でストンとした形状で**246**とよく似ている。口縁部は中央に膨らみを持ち、波打ちながらやや外反している。口縁部は内・外側ともに横位のナデである。胎土には角閃石が多く含まれている。外面は胴部が縦位のハケ後に縦位のナデであり、部分的に器面が剥落している。内面は胴部が横位のハケ、底部付近が縦位のハケ・縦位のナデを施す。**249**は残存率80%。底部は丸底を呈す。胴部最大径は肩部に位置している。頸部は縮まりがよい。口縁部は外反しており、外側に大きく開いている。口縁部外面は横位ナデ後縦位ハケを施している。胴部外面は上の方は横位のハケ、中位から下は縦位のハケである。内面は頸部に若干横位のハケを施し、胴部は縦位のケズリを行っている。**250**は残存率50%。底部が残存していないため不明。胴部は卵型である。頸部は縮まりが悪く、口縁部が短くて若干外反している。片手で持てるくらいの小型の壺である。口縁部は丁寧な横位のナデで外面には若干縦位のハケが見られる。胴部外面は斜位のハケである。底部付近にはハケをナデ消している痕跡が見られる。内面は胴部が横位のハケ後横位のナデと指頭圧痕、その後斜位のハケ、指頭圧痕である。底部はケズリを施している。**251**は底部が尖底である。胴部は丸くなっているが完形であった。頸部は縮まりが甘く、口縁部は一部だけしか残っていない。接合も口縁部と胴部上位のみ。若干ひずんでいる。口縁部は短く、外反している。口縁部は内・外側ともに横位のナデ、胴部外面が丁寧な横位のナデ、胴部内面はケズリ後横位のナデを施している。**第97図**は中型の壺で口縁部から胴部中位までが残っている。**252**は残存率80%。正面の図面と真上から見た図面と載せている。頸部から底部までが残存しており、ほぼ完形にまで接合で復元できた。底部は平底に近い丸底である。胴部最大径は上位に位置しており、肩が張っている。口縁部は頸部からきれいに一周打ち欠かれており、故意的に打ち欠いて廃棄した可能性が高いと考えられる。頸部径は円ではなく、歪んだ梢円形を呈している。そのため見る場所によって形状が違う。胴部外面は底部から胴部中位に向かってケズリを行いナデで整えている。中位から上は斜位のハケを施している。内面は胴部上位には土器を持ち上げた際に付いたのだろうか、指頭圧痕がきれいに指4本で並んでいるのが明瞭に残り、指がちょうどはまる。その下には太めの斜位のハケが施されている。中位から下には細めの斜位のハケ、底部には明瞭に指頭圧痕が残っている。**253**は胴部の中央が膨らみを持ち、胴部はなで肩で、頸部は縮まりがよい。口縁部は波打ちながら内湾し、口唇部には1条のくぼみがある。口唇部端は内方につまみ入れている。口縁部は内・外側ともに横位のナデ、胴部外面は横位のハケとその下に斜位のハケを施した後に横位のナデ、内面はケズリ後にナデを行っている。**254**は胴部最大径は中位に位置しており、球形を呈している。外面は目の太い斜位のハケ、内面は中位から下は斜位のケズリ、その上が斜位のハケと指頭圧痕が明瞭に残っている。**255**は壺の口縁部から胴部中位である。頸部は縮まりがよく、口縁部は波打ちながら外反しており、口唇部端は内方・外方につまみ出しており、上面には1条のくぼみがある。胴部は肩が非常に張っており、底部は欠損し不明。口縁部は内・外側ともに横位のナデである。胴部外面は上位が横位のナデ、中位から下は単位が狭い斜位のハケ後に斜位のナデを施している。胴部内面は上位が非常に強めの斜位のハケ、中位は太めの斜位のハケ、下位には縦位のナデを施している。**256**は口縁部から胴部中位が残存している。器壁はほぼ均一。口縁部は若干外反して、口唇部は中心がくぼんでいる。外面は口縁部が横位のナデ、胴部が斜位のハケ、下に行くと横位のハケを行っている。内面は口縁部が横位のナデ、胴部が斜位のハケである。**257**は口縁部から胴部中位が残存している。口縁部は、口唇部で若干外反する「く」の字状の口縁部である。口唇部端は先が尖って、外方につまみ出している。胴部はなで肩である。外面は口縁部・頸部がナデ、

胸部が横位のナデ後に縦位のハケを施している。内面は口縁部が横位のナデ、横位のハケ後にもう一度横位のナデで、胸部も横位のナデである。**258**は口縁部と底部が欠損している。底部はおそらく丸底になるだろう。胸部は球形を呈しており、最大径が上位に位置する。若干残る口縁部は外反し、もう少し伸びると考えられる。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胸部外面は斜位のハケである。胸部内面は上位が斜位のハケ、中位から下は縦位のケズリを施している。第98図は口縁部から胸部中位まで、残存率が少ない破片資料である。**259**は胸部が球形を呈している。口縁部が上方でやや外反する。端部は外方につまり出している。口縁部は内・外面ともに横位のハケ後に横位のナデ、胸部外面が横位のナデ後に斜位のハケ、内面は胸部が横位のナデ後に斜位のハケ、部分的にタキキを施している。**260**は頸部の縮まりがやや甘い。口縁部はやや内湾しており、口唇部端の上面はきれいに面取りをして端部を外方につまり出している。外面は口縁部が横位のハケ後横位のナデ、胸部は縦位のハケ・横位のハケ後横位のナデである。丹塗りの痕跡も確認できる。内面は口縁部が横位のナデ、胸部はナデ後横位・斜位のハケを施している。**261**は胸部が球形を呈し、最大径を中位に持つ。色調が内・外面ともに鮮やかな橙色である。口縁部は「く」の字状に外反気味に開き、口唇部端は外方に若干まるくおさめている。口縁部は内・外面ともに非常に丁寧になでられている。外面は肩部分が上方からの縦位のハケ、その下が胸部下方からの縦位のハケを施している。内面は肩部分がかなり強い斜位のハケで、一見ケズリのようにも見える。下半は下方向へ縦位のハケ後ナデを行っており、指頭圧痕も明瞭に残す。**262**は肩がなで肩で、胸部最大径は器高の中央に位置するだろう。頸部は縮まりがよい。口縁部はやや内湾するが、口唇部端は丸くおさめている。外面は口縁部が内・外面ともに丁寧な横位のナデ。胸部外面中位より下は縦位のハケが残っている。内面は口縁部が斜位のハケ、胸部が目が粗いハケで斜位のハケを施す。**263**は胸部最大径が中位に位置しており、復元径で18.2cmを測る。頸部は縮まりがよい。口縁部が肥厚しながら外反しており、口唇部で内面が若干へこむ。口縁部は内・外面ともに横位のハケ後に横位のナデ、胸部外面は全体的に斜位のハケを施し、肩部分だけ横位のナデでナデ消しを行っている。内面は頸部直下に強めの横位のナデ、その後不定方向へのハケ、そして上から指頭圧痕を施している。**264**は胸部が若干歪んでいる。頸部は縮まりが非常によい。口縁部は長めで波打ちながら外反しており大きく外側に開いている。口唇部は上面に面取りを行って1条のくぼみがあり、端部を外方につまりだし尖らせている。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胸部外面は器面が剥がれており、若干縦位のハケが残っている。内面は胸部が斜位のハケを施している。**265**は口縁部から胸部中位が残存している。胸部は球形で、底部はないがおそらく尖底を呈すだろう。中型の甕で、口縁部は「く」の字状に伸びており、口唇部で若干外反している。外面は胸部がナデ、内面は胸部が斜位のハケ後に縦位のナデを施している。口縁部は内・外面ともに横位のナデである。**266**は残存率50%。胸部は、肩部がなで肩で脛があまり張らずにストンとした形状である。口縁部は「く」の字状でやや外反し、短い。頸部は若干縮まり気味で、外面は口縁部が横位のナデ後に縦位のハケ、胸部が横位のナデ後に縦位のハケを施している。内面は口縁部が横位のナデ、胸部が横位のナデ後横位のハケで肩辺りがナデ消されている。**267**は残存率45%。底部は尖り気味の丸底である。胸部は中位が膨らんでおり、頸部は縮まりが甘い。若干残る口縁部は外反している。頸部は器壁が厚く、内方に突出している。外面は底部から上に向かってヘラケズリ、胸部中位から縦位のハケを施している。内面も同じく底部がヘラケズリ、頸部から胸部中位までは太めの斜位のハケを施す。**268**は残存率約40%。底部は尖底であり、胸部は肩が非常に張り、そこからあまり細くならず底部へいく。頸部は縮まりが甘く、口縁部は少し残っておりそれからは若干外反して短い口縁が付くと思われる。外面は口縁部から胸部上位までが横位のハケ後に横位のナデである。頸部直下に1条の沈線も見られる。胸

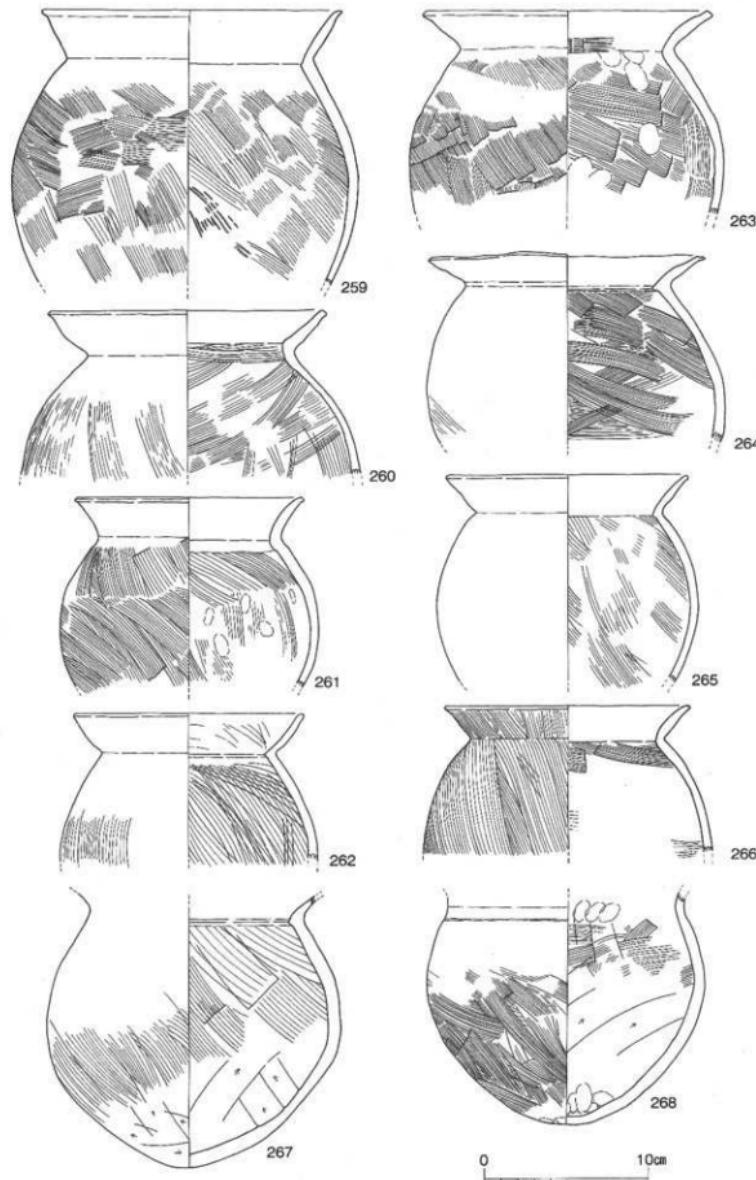


第97図 方形環溝出土土器 (表④) (1/3)

部が横位のナデ後不定方向へのハケである。底部付近はハケ後ナデ消しで、底部は指頭圧痕が施されている。内面は口縁部が横位のナデ後指頭圧痕で、胴部上位が斜位のハケ、中位には斜位のケズリが施されている。底部は指頭圧痕である。内面の胎土には赤色粒子が多く見られ、外面の器壁は黒い。

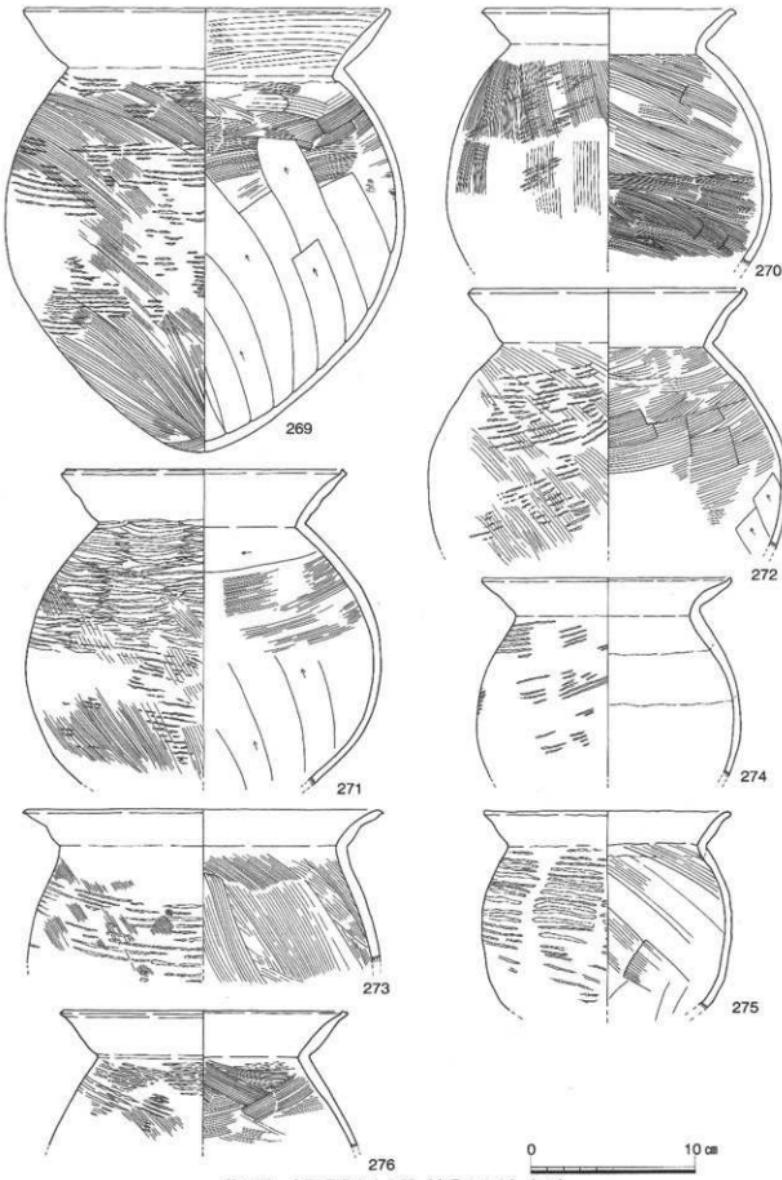
#### 【参考文献】

- 諫見富士郎 1988『上篠原遺跡』長崎県立国見高等学校考古学研究部
- 福富裕和 1980『黒丸遺跡』長崎県大村市黒丸町所在黒丸遺跡の調査報告 長崎県大村市黒丸遺跡調査会
- 福富裕和・橋本幸男 1988『稗田遺跡』一弥勒寺地区農業構造改善事業にかかる遺跡の発掘調査報告書一 長崎県大村市稗田遺跡調査会
- 小田富士雄・上田龍児 2004『長崎県・景草園遺跡の研究』福岡大学考古学研究室研究調査報告 第3冊 福岡大学人文学部考古学研究室
- 金関惣・佐原眞編 1987『弥生土器の整作技術・弥生土器の紋様』『弥生文化の研究』雄山閣出版株式会社
- 蒲原宏行 1989『北部九州出土の畿内系二重口縁壺 一その編年と系譜をめぐって一』『古文化談叢』第20集 発刊記念論集(中) (小田富士雄編) 九州古文化研究会
- 佐藤良二郎・江藤和幸 2004『小部遺跡』宇佐地区遺跡群発掘調査報告書I 大分県宇佐市教育委員会
- 重藤輝洋・坂本真一 2006『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査報告書 第208集 福岡県教育委員会
- 高野晋司 1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書 第73集 長崎県教育委員会
- 高野晋司 1998『沖城跡』長崎県文化財調査報告書 第143集 長崎県教育委員会
- 田川肇・副島和明 1988『百花台公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集 長崎県教育委員会
- 竹中哲郎・織田健吾 2006『龍王遺跡(倉地川古墳)』雲仙市文化財調査報告書(概報) 第1集 長崎県雲仙市教育委員会
- 武末純一 1977『遺物の検討(2)土師器』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XIX— 福岡県八女市室間所在遺跡群の調査 福岡県教育委員会
- 武末純一 1989『小型丸底壺の軌跡—考古学から見た日朝交流の一断面—』『古文化談叢』第20集 発刊記念論集(下) (小田富士雄編) 九州古文化研究会
- 田中裕介・土居和彦・清水宗昭 1999『小追辻原遺跡 I A・B・C・D区編』九州横断自動車道関係埋蔵文化財 発掘調査報告書10 大分県教育委員会
- 辻田直人 2002『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書(概報) 第2集 長崎県国見町教育委員会
- 辻田直人・竹中哲郎 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報) 第4集 長崎県国見町教育委員会
- 西健一郎 1983『黒髪式土器の基礎的研究』『古文化談叢』第12集 発刊10周年記念論集 九州古文化研究会
- 古門雅高 1997『稗田原遺跡I』長崎県文化財調査報告書 第136集 長崎県教育委員会

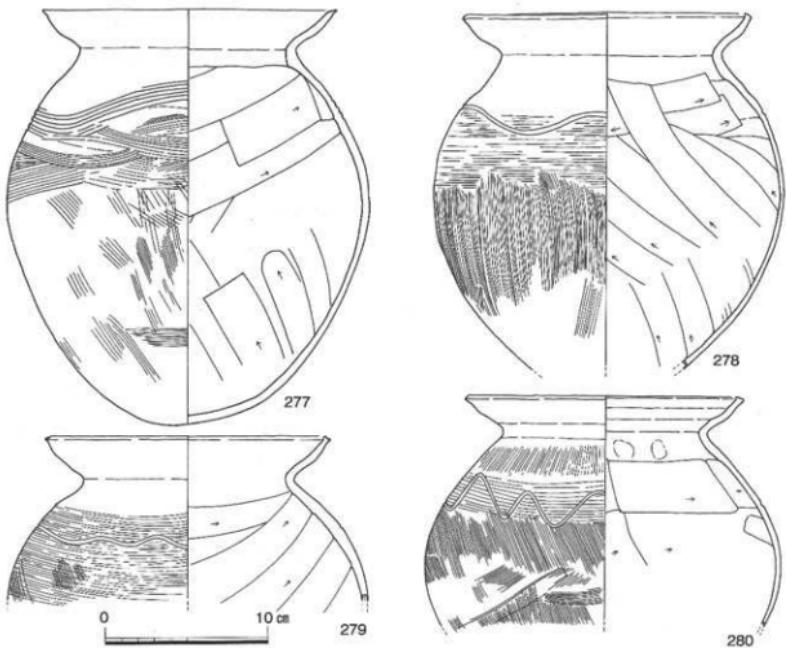


第98図 方形環溝出土土器 (甕⑤) (1/3)

第99図は外面調整にタタキが施されている中型の甕である。269は残存率95%で、接合によってほぼ完形にまで復元することができた。270～276は胴部中位までしか残っておらず、いずれも底部形態は不明である。269は底部が尖底で、胴部最大径は上位に位置している。肩が張っており、下半部はスリムである。頸部は綺まりがよい。口縁部は長く、中央部が肥厚しながら内湾する。口唇部端は内側をつまみ出し尖らせている。胴部外面は左上がりのタタキの上から部分的に斜位のハケを施している。内面は口縁部に横位のハケ、胴部上位に細かい横位のハケ、胴部下位は上方向への縦位のケズリを施している。270は胴部が球形を呈しており、頸部の綺まりがよい。口縁部は中央部にやや被熱の痕跡が残っており、「く」の字に開き外反する。口唇部端は外側に斜めに切れており、綺麗に面取りされている。胎土には金雲母が含まれているため搬入品か。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施した後、外面には縦位のナデ、内面には横位のハケを施している。胴部外面は左上がりのタタキの後に縦位のハケである。被熱のためか、胴部下半は器面が剥落・赤色化している。胴部内面は上半部分が目の粗いハケ、下半部分は目の細いヘラ工具によるケズリが施されている。271と272は胎土や確認できる調整、残存状況など類似する点が多く見られる。口径も同じで、胴部最大径は中位に位置する。頸部は綺まりがよく、口縁部は外面が波打ちながら外反する。口唇部端は内側につまみ入れて稜を作っている。端部上面は271には1条のくぼみがあり、272はきれいに面取りがされている。胴部は球形を呈する。口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えて仕上げている。271は胴部上位の外面に横方向へのとても強調した若干左上がりのタタキを行っており、中位辺りから部分的にタタキを施し、その上から斜位のハケである。胴部下位はタタキを行ない斜位のナデ後に強めの斜位のハケを行っている。胴部内面は頸部直下と中位から下部分にはヘラケズリを行い、肩部のみ横位のハケを施している。272は胴部外面全体にタタキを施した後に上から斜位のハケを行っているため、タタキの痕跡が部分的にしか残っていない。胴部内面は斜位のハケ、中位から下に縦位のヘラケズリを行っている。273は胴部が口径より狭く、なで肩に細身で、頸部は綺まりが甘い。口縁部は外面が大きく波打ちながら外反している。胎土には金雲母が多く含まれるため搬入品か。口縁部は丁寧な横位のナデで整え、胴部外面は横方向のタタキを全体に施した後部分的に斜位のハケ、内面は斜位のハケを施している。274は胴部が球形を呈す。口縁部は外反し中央で肥厚しながら若干内湾する。口唇部端で外方に大きくつまみ出し外面に稜を作る。胴部外面は左上がりのタタキを施しており、部分的にナデ消しを行っている。器面が荒れているためタタキが分かりづらい。内面は、甕を作る際の輪積み痕が明瞭に確認でき、それをナデで整えているようだ。器壁の中心辺りがやや黒くなっている。275は胎土に角閃石を多く含んでいるため在地系のものであろう。底部は欠損しているが残っている部分の傾き具合から、おそらく丸底になると思われる。胴部は球形を呈しており、最大径は中位に位置している。頸部は綺まりが甘い。口縁部は外面中央がやや肥厚しながら外反しており、口唇部端は外側に丸くおさめている。胎土に含まれる粒子は大きい。胴部外面には横方向へのタタキを施して頭部から下にしている。他のタタキに比べて単位が大きく、タタキ同士が重なっていないため分かりやすく確認できた。内面は強調した斜位のハケ後にナデで整えている。276は口縁部から胴部上位までが残存しており、おそらく胴部中位に最大径がくると思われる。頸部は綺まりがよい。口縁部は中央が肥厚しながら外反して、口唇部端は内側につまみ入れる。269の口縁部と非常によく似ているため、残存していない部分は類似した形状になるのではないかと考えられる。胎土に金雲母・雲母粒子を含んでいる。胴部外面には右上がりのタタキを施しており、下方には斜位のハケを施す。内面は不定方向へのハケが施される。口縁部は内・外面ともに横位のハケ後に横位のナデで整えて仕上げている。

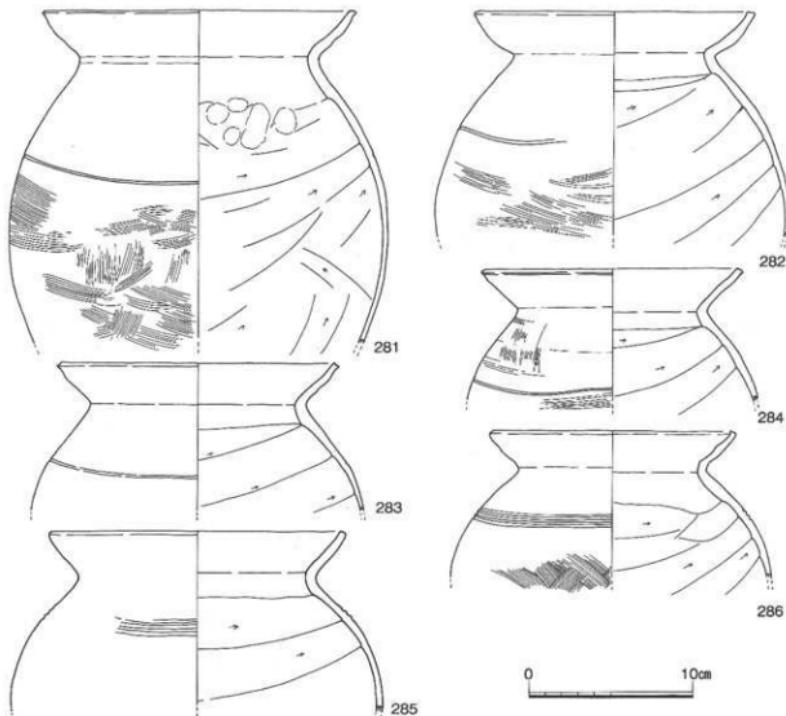


第99図 方形環溝出土土器（甕⑥タタキ）(1/3)



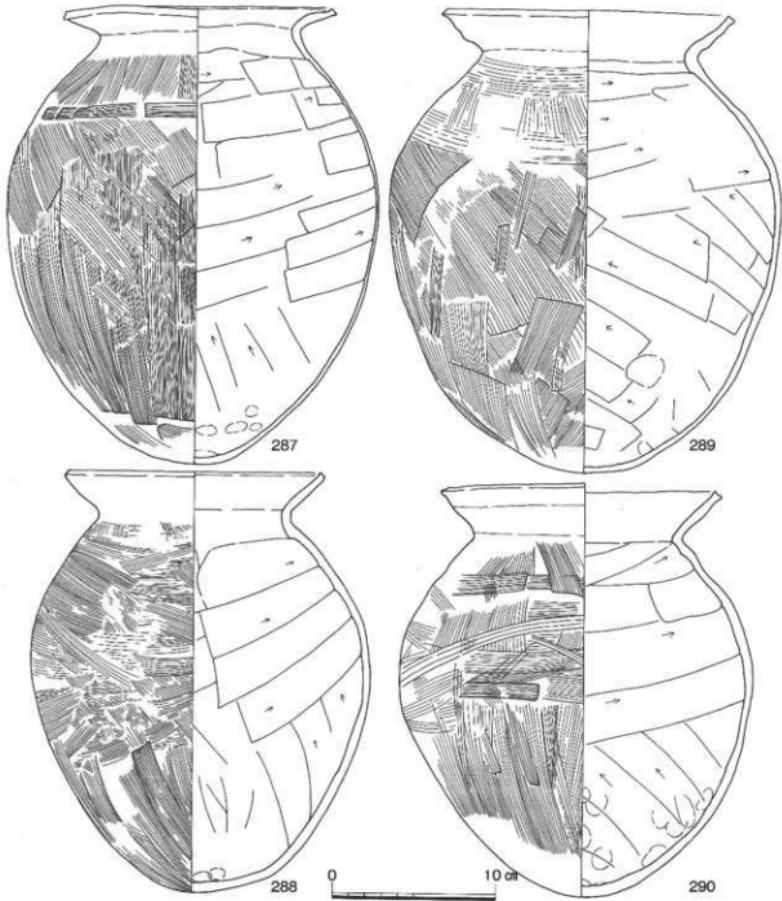
第100図 方形環溝出土土器（発⑦波状文）(1/3)

第100図はしっかりとした波状沈線文を施文する布留系の中型壺である。277・278は残存率がよく、277は接合により残存率50%まで復元できた。279・280は胴部中位から下が欠損しているため底部形態は不明である。口径や器高・形状は4点ともほぼ同様と、類似する点が多く見られる。277の底部は丸底を呈しているため、他の3点も丸底になるのではないかと思われる。胴部は最大径が上位に位置しており、下半部がスリムで肩が張っている。頸部は縦まりがよい。口縁部は内湾しており、口唇部端の形状は各々で異なっている。口縁部の調整は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えて仕上げている。胴部外面の肩部には波状文があり、277はあまりきれいではない沈線が4条、278～280は1条の沈線が施文されている。波状文を施文する前には横位のハケや横位のナデで整えてから施しているようである。胴部下位には横位のナデ後に縦位のハケを行っている。278は口縁部が一度外反し、中央が肥厚しながら内湾する。口唇部は内側に稜を作る。279は内面調整がヘラケズリだが、ケズリが甘く器壁が厚いままである。しかし、器面が非常にきれいに精製されており、これらの中では最も丁寧できれいな波状文を施している。口唇部端には1条のくぼみが見られる。胴部外面は、頸部直下には縦位のハケかナデ、胴部中位には斜位のハケを施している。280の波状文は他のものに比べると、波状のアップグランが激しい。器壁が2～3mmと非常に薄く仕上げられている。図示した4点はいずれも、胎土に金雲母・雲母粒子が少量から多量に含まれており、色調はにぶい黄橙色である。胴部内面に施された斜位や横位のヘラケズリにより比較的の器壁が薄く仕上がっている。これらのことから、搬入品である可能性が高いと考えられる。



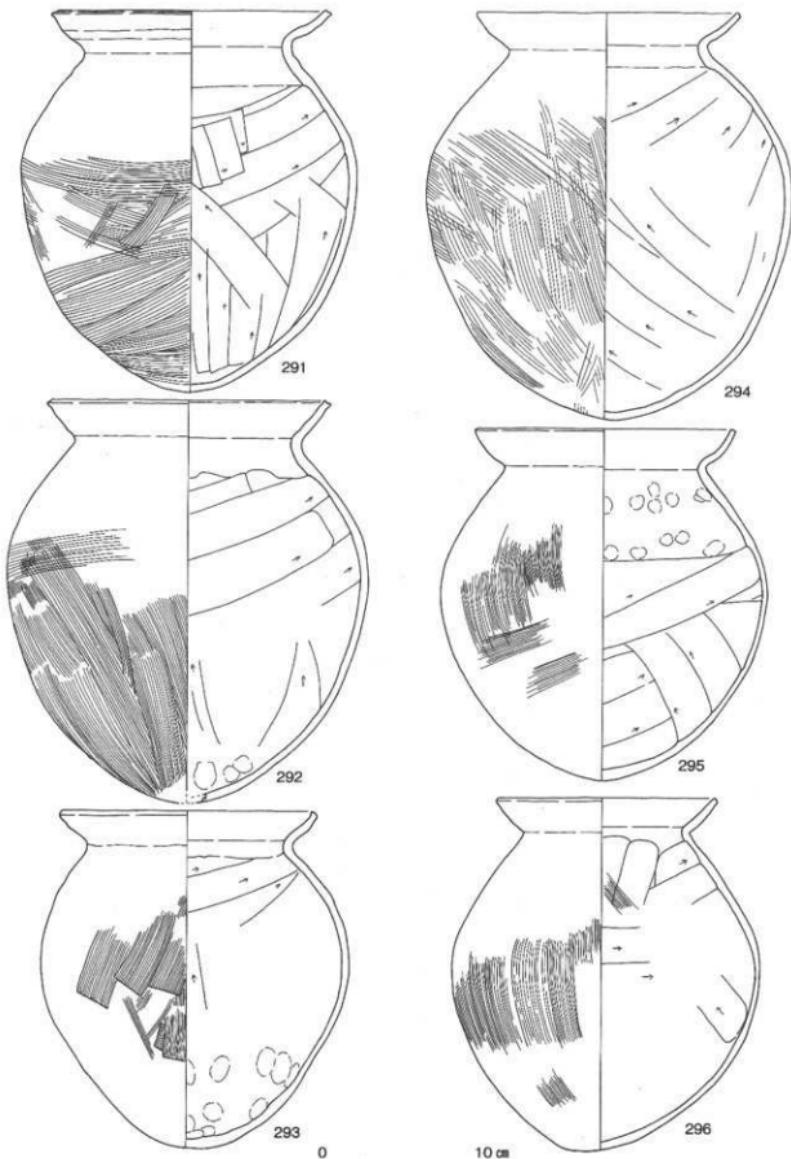
第101図 方形環溝出土土器（焼⑧直線文）（1/3）

第101図はしっかりとした直線沈線文を施す布留系の中型壺である。いずれも胴部中位から下は欠損しており、胴部下位・底部形態などは不明である。胴部最大径は中位に位置しており、頸部は綺まりがよい。口縁部は「く」の字状を呈しており、281・282が中央で肥厚させながらゆるやかに内湾して、283～285は若干外反、286は内面が波打ちながら外反している。口唇部端は形状が各々で異なっている。口縁部の調整は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えて仕上げている。肩部には直線文が、285・286は3条、281～284は1条の沈線が施されている。第101図の波状沈線文の中型壺と同様に、胎土には金雲母・雲母粒子が含まれている。そのため、搬入品である可能性が高い。胴部外面は頸部直下に継位のハケやナデ、肩部には横位のハケ後に横位のナデを施しており、その上から直線沈線文を施している。内面は横方向への斜位のヘラケズリを施しているが、いずれも器壁はあまり薄くできてはいない。281は内面の頸部直下に指頭圧痕やナデが明瞭に残っている。285は器面が風化しており調整や沈線文が分かれりづらくなっている。他のものに比べると頸部の綺まりが甘く、外面には稜線を持たない。286は胴部下方の外面には斜位のハケが乱雑に施されている。



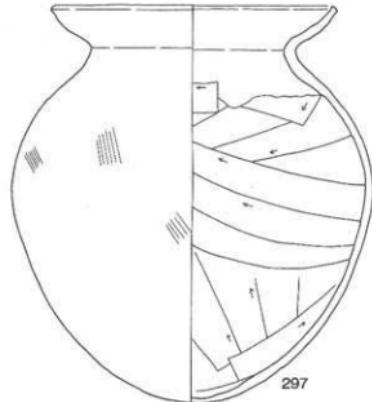
第102図 方形環溝出土土器（巻③）(1/3)

第102図は完形近くまで復元できた中型壺である。いずれも残存率約70%以上と非常によく、器高・口径ともにほぼ同様である。胸部は長胴形で、底部は丸底を呈している。287は頸部の縮まりが非常によく、胴部に対して口縁部が小さい。口縁部に特徴が見られ、内面中央が肥厚しながら外反し、上から見ると朝顔状に水平を成し、外側に開いている。口唇部端は内方・外方につまみだしている。口縁部の形状は西部瀬戸内系のものに類似しているが、胎土には角閃石が多く含まれるため島原半島で作った在地系と考えられる。口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデ、胴部外面は底部から上に向かって継位のハケ、肩部には1単位の横位のハケを施している。胸部内面はヘラケズリ、底部は指頭圧痕が明瞭に残る。器壁は薄い部分で2mmと非常に薄く30区・SD-3の古式土師器の中では一番薄い仕上がりで、作りがとてもきれいである。288は口縁部が「く」の字状を呈し外反しており、口唇部

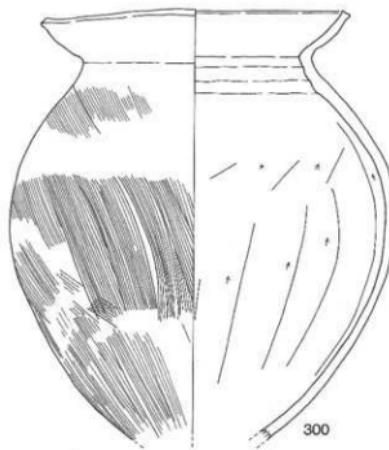


第103図 方形環溝出土土器 (要⑩) (1/3)

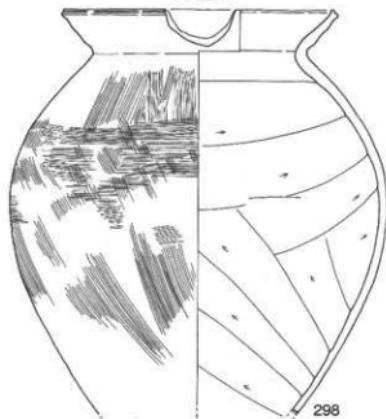
端は内方につまみ入れて稜を作っている。胴部外面調整が乱雑なハケ、胴部内面はヘラケズリを施す。全体の作りが粗雑である。**289**は胴部に一番膨らみを持つ。口縁部が内・外面ともに大きく波打ちながら「く」の字状に外反し、上方で若干内湾する。口唇部端はきれいに面取りをして、中央を若干くぼませている。胴部外面は肩部に横位のハケ、中位から下に縦位のハケ、内面はヘラケズリを施している。**290**の口縁部は外面が波打っている。口唇部端には1条のくぼみを持ち、内方・外方につまみ出している。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施している。胴部外面は上半部が横位のハケ、下半部は縦位のハケである。胴部内面はヘラケズリ、底部は指頭圧痕が明瞭に残っている。第103図は完形近くにまで復元できた中型壺である。内面調整はケズリだが、器壁はあまりうすくはない。**291**は残存率50%。底部は尖り気味の丸底、胴部は最大径が中位より若干上に位置しており、肩が張る形状である。頸部は締まりが甘い。口縁部は頸部から一度外反し、上に行くほど内湾する。口唇部端には1条のくぼみが見られる。口縁部が内・外面ともに横位のナデである。胴部外面は頸部から上位は横位のハケ後ナデである。上位から下は横位・縦位のハケ後斜位のハケを施した部分をナデで整えている。胴部内面はケズリを施している。**292**は残存率60%。底部は丸底を呈す。胴部最大径は中位よりやや上に位置する。胴部が非常に膨らんでいる。頸部はやや締まりが甘く、口縁部は若干内湾している。端部には1条のくぼみがある。口縁部は横位のナデで整えている。胴部外面は上位が横位のナデ、中位には横位のハケがあり、その下は縦位のハケである。内面は胴部がケズリ、底部には指頭圧痕を施している。**293**は残存率60%。底部は丸底を呈す。胴部は上半部に膨らみを持ち、最大径は中位よりやや上に位置する。頸部は締まりが甘い。口縁部は短くて内湾し、口唇部端は内側につまみ入れている。口縁部は丁寧な横位のナデを施す。胴部外面は全体に斜位のハケが施されており、内面はケズリと底部に指頭圧痕が明瞭に残っている。**294**は接合によってほぼ完形にまで復元できた。底部は丸底を呈す。胴部の最大径は中位に位置しており、下半部に膨らみを持つ。頸部は締まりがやや甘く、口縁部はゆるやかに内湾している。口唇部端は丸くおさめる。口縁部から頸部まで横位のナデ。胴部外面は上位が縦位のナデ、丹塗りの痕跡が若干残る。中位から下は縦位のハケ後ナデと部分的にナデ消しを行っている。胴部内面はケズリを施している。**295**は残存率50%。底部は尖り気味の丸底。胴部は最大径を中位に位置しており胴部中央が張っている。頸部は締まりがよい。口縁部は内湾しており、器壁が上から下まで薄い。口唇部端はきれいに面取りをしている。外面は口縁部が横位のナデ、胴部が縦位のハケ・横位のハケ後ナデを全体的に行っているが、剥がれている部分が多いため判然としない。内面は口縁部が横位のナデ、胴部上位が指頭圧痕、その下にケズリを施している。**296**は残存率50%。底部は尖底、胴部は最大径が胴部中位に位置し、なで肩で、底部に向かって細くなる。頸部は強く締まっている。口縁部は短く、若干内湾しており、口唇部端は丸くおさめている。口縁部は内・外面、頸部外面は横位のナデで整えている。胴部内面はケズリ、外面は縦位のハケ後に縦位のナデを施している。第104図は部分的には残っていないが、完形に近くまで復元できた中型壺である。**297**は胴部はやや肩が張っており、そのまま丸く底部に向かって、丸底を呈す。外面は口縁部が横位のナデ、胴部は縦位のハケ後にナデ、ナデ消し等でハケを分からないように仕上げている。内面は口縁部・頸部は横位のハケ後横位のナデ、胴部はケズリを施している。**298**は底部だけ残っていない。胴部最大径は胴部中央にあり、口縁部より開いている。頸部は締まりがよく、口縁部は「く」の字状で口唇部には1条の沈線がめぐっている。外面は口縁部から頸部は横位のハケ後に横位のナデ、胴部上位は横位のハケ後に部分的にナデ消しを行って、その上からまた縦位のハケを施している。胴部下位は縦位のハケ・縦位のナデである。口縁部には人為的に打ち欠いた痕跡が確認できる。内面は口縁部が横位のナデ、胴部が丁寧なケズリを施した後その上からきれいにナデであり、ケズリの単位の境



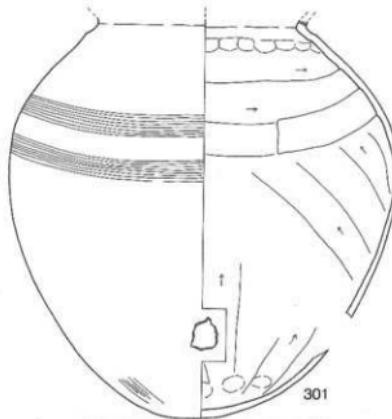
297



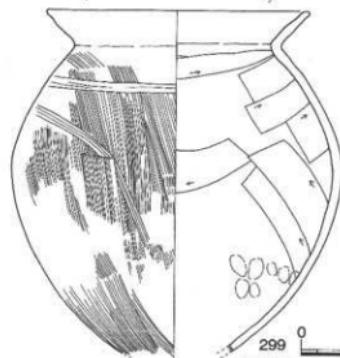
300



298

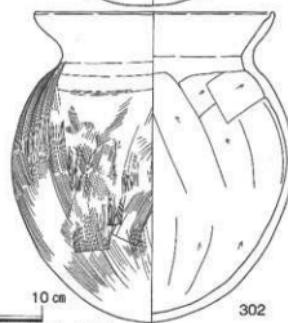


301



299

0

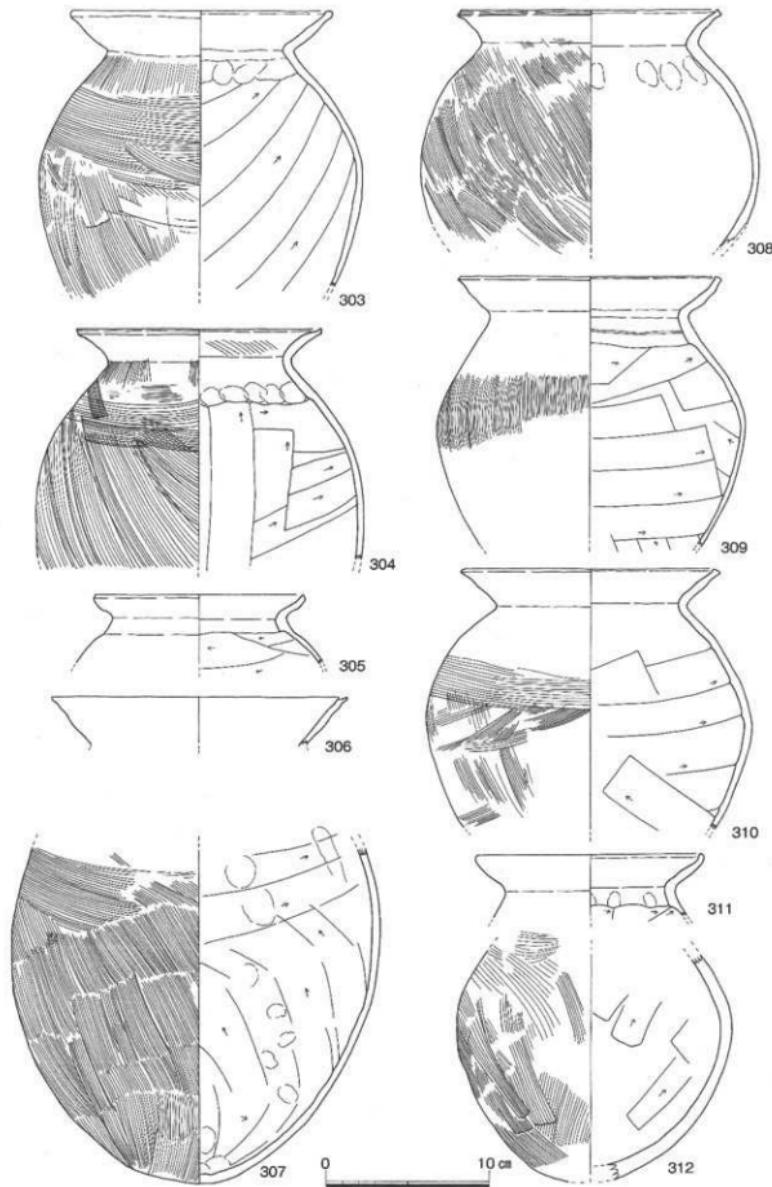


302

10 cm

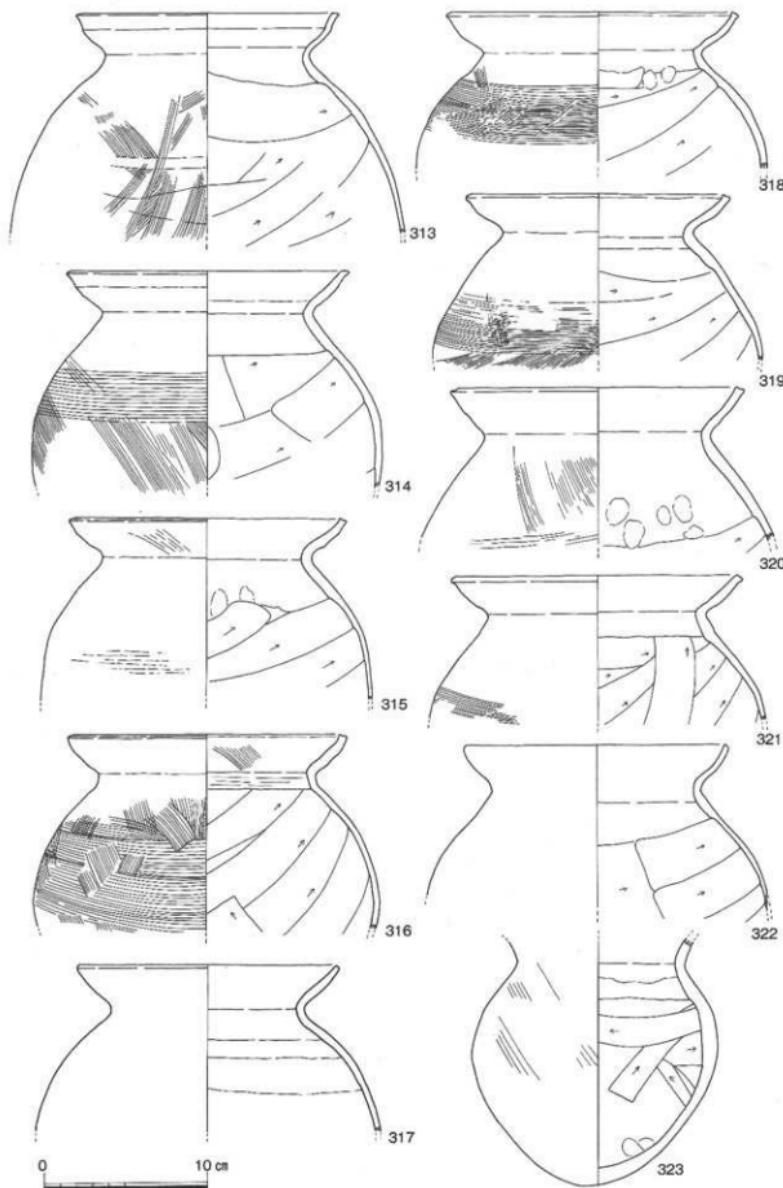
第104図 方形環溝出土土器(要①)(1/3)

目が分かりづらい。299は残存率50%。口縁部は口唇部前で若干外反、頸部は縫まりがやや甘く、胸部は肩部下が若干張っており、底部に向かって細身になり、おそらく丸底になる。外面は横位のハケ後丁寧な横位のナデ、頸部が横位のナデ、胸部は横位のナデ後縦位のハケ、内面は口縁部が横位のナデ、胸部がケズリ、下方に指頭圧痕が明晰に確認できる。300は接合によってほぼ完形にまで復元できた。底部は残存していないがおそらく丸底になるだろう。胸部は最大径が肩部に位置している。頸部は縫まりが若干悪い。口縁部は内湾しており、水平にできていない。口唇部端は断面方形で中央がくぼんでいる。外面は口縁部が横位のハケ後に横位のナデ、頸部から胸部上位は横位のナデ、その下が斜位のハケ、胸部中位から下が横位のナデ後斜位のハケである。内面は口縁部が横位のナデ、頸部が横位のナデ、胸部はケズリである。301は底部は丸底を呈している。胸部は最大径が上位に位置しており、肩が張っている。頸部は縫まりがやや甘く、口縁部をきれいに打ち欠いており、故意的なものだろうか。胸部外面は肩に横位のハケ、全体にはナデを施し、内面はケズリ、頸部直下と底部に指頭圧痕が明晰に残る。302は口縁部が一部分欠損している以外は接合で完形にまで復元できた。底部は丸底を呈す。胸部は球形で最大径は中位に位置している。頸部は縫まりが甘く、口縁部は若干内湾している。内面は口縁部から胸部は横位のナデ、胸部から底部はケズリである。第105図は中型斐の口縁部から胸部中位や、胸部のみなどの破片資料である。303は胸部最大径は、胸部中位より若干上に位置している。なで肩で、頸部の縫まりは甘い。口縁部は内湾しており、端部は若干外反し丸くおさめている。口縁部は内・外面ともに横位のナデで丁寧に整えている。胸部外面は上位が縦位のハケ、肩部に横位のハケ、中位より下に縦位のハケを施している。内面には頸部下が指頭圧痕、上位が下から上への縦位のケズリである。304は口縁部はやや外反し、口唇部が直立する。頸部は強く縫まり、肩が張っていない。外面は、口縁部が横位のナデ、頸部が縦位のハケ後横位のナデ、胸部は斜位のハケ後に横位のハケ、その後部分的にナデである。内面は、口縁部は斜位のハケ後に横位のナデ、頸部は指頭圧痕、胸部はケズリを施している。305は胸部は肩が張っており、頸部の縫まりは甘く、口縁部は短くて内湾している。全体的に横位のナデ、胸部上位内面のみ横位のケズリを施している。306・307は胎土や色調などから同一個体と考える。底部は丸底に近い平底である。胸部最大径は中位よりやや上の方に位置する。長胴である。口縁部は波打ちながら斜め上にのびている。器壁は全体的に薄い。胸部外面は上位が横位のハケ、中位から下は底部から上に向って縦位のハケを施している。内面は中位から上半部が横位のケズリ、底部はくももの巣状の横位のケズリを施している。最後に全体に行なった指頭圧痕・ナデが明晰に残る。308は胸部は丸く、頸部は縫まりが甘い。口縁部は外反しており、端部には1条のくぼみがある。口縁部は内・外面ともに横位のナデで、胸部外面は斜位のハケ、胸部内面は横位のナデ後指頭圧痕である。309は底部は残存しておらず不明、胸部は肩が張っており底部に向かってスリムな形状を呈している。外面は口縁部が横位のナデ、頸部から胸部上位が横位のハケ後に横位のナデ、肩部が縦位のハケでその上から胸部下までナデを施している。内面は口縁部から頸部が横位のナデで頸部の少し下に1本の沈線が見られる。胸部はケズリである。310は胸部は球形、頸部は若干縫まりが甘い。口縁部は若干外反しており、外側に開いている。口縁部は内・外面ともに横位のナデ。胸部外面は横位のハケ後に横位のナデ、内面はケズリ後に指頭圧痕を施している。311は口縁部径が小さく、若干外反し、口唇部で内湾する。外面は横位のハケ後に横位のナデ、内面は口縁部が横位のハケ後横位のナデで、頸部は横位のナデ後に指頭圧痕を施している。胸部はケズリで厚さ3mmまで削られている。312は胸部最大径が胸部上位に位置している。底部は欠損しているが、傾きから見ておそらく丸底になると思われる。胸部外面は中位からナデを行なった後に斜位のハケ、下位は縦位のハケを施している。内面は縦位のケズリを行なった部分に上からナデを施している。第106図



第105図 方形環溝出土土器 (発⑫) (1/3)

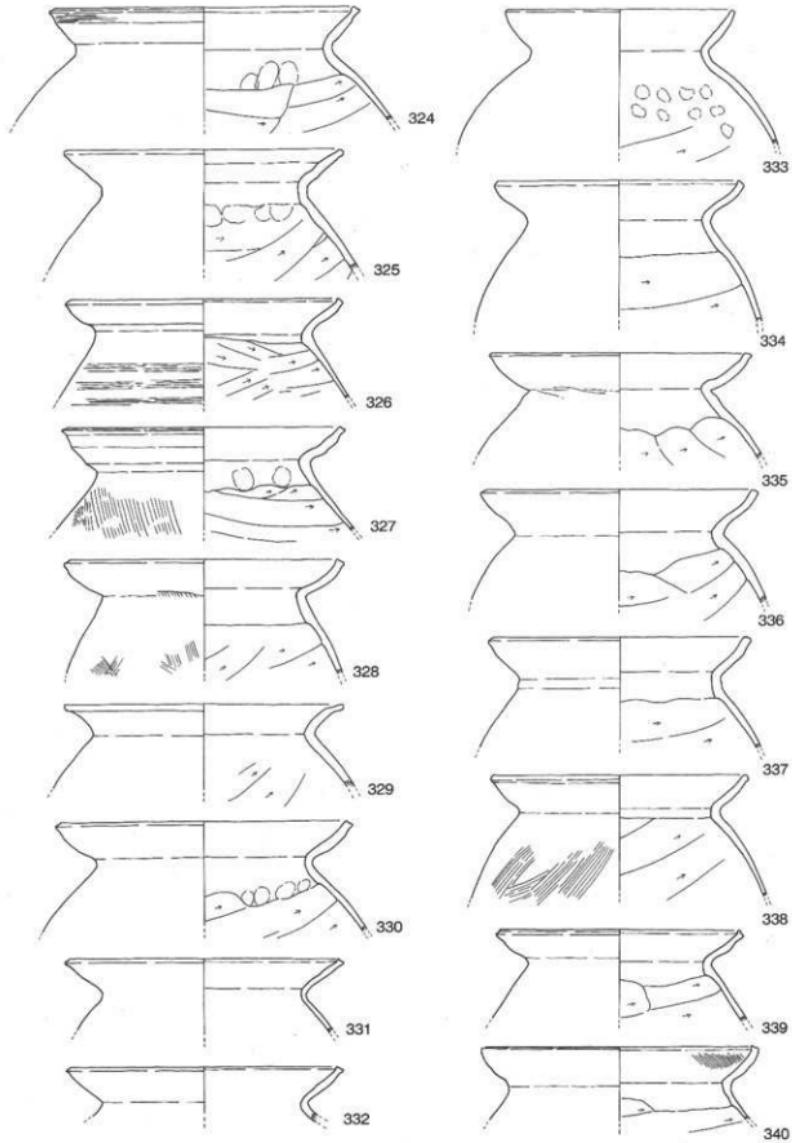
は中型壺の口縁部から胴部まで残っている破片資料を集めたものである。313は若干大きめの壺である。胴部最大径はおそらく胴部中位に位置し、肩はなで肩である。頸部は締まりが甘い。口縁部は逆「く」の字に内湾している。口縁部は内・外面ともに横位のハケ後に横位のナデ、胴部外面は不定方向のハケを行った後にミガキを施し、ナデで整えている。胴部内面はケズリである。314は口縁部が若干内湾し、口唇部は綺麗に面取りされている。頸部は締まりがよく、胴部はあまり肩が張らず丸くなる。口縁部から胴部上位は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は中位に横位のナデ・横位のハケ後縦位のナデ、その下には横位のナデ後縦位のハケを施している。胴部内面は中位にケズリを施している。315は口縁部は「く」の字に開き、やや内湾する。口唇部は面取りされ、中央部分に1条の溝を持つ。口縁部及び外面はハケの後丁寧なナデにより調整痕がナデ消されている。胴部内面は、しっかりとしたケズリを施している。316は口縁部は若干外側に開き口唇部で内湾する。頸部はやや強めに締まり胴部は丸くなっている。口縁部と頸部外面は横位のハケ後に横位のナデ、口縁部内面が横位のハケ後横位のナデ、頸部内面は横位のケズリ後横位のナデである。胴部外面は横位のハケ後に部分的にナデ消しを行い、その上から斜位のハケを行っている。胴部内面は縦位のケズリを行っている。317は口縁部が若干内湾する。頸部は締まりがとても甘い。口縁部が一番厚くて胴部は薄く仕上げている。外面はナデ、内面は口縁部がナデ、胴部がケズリ後丁寧なナデとナデ消しでケズリの痕を目立たなくしている。318は胴部は肩が張っており、頸部は締まりがよく、口縁部は内湾している。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は横位のナデ後に横位のハケ、その上から部分的に斜位のハケ、胴部内面は上位に指頭圧痕、その下はケズリである。319は胴部はなで肩で、頸部は締まりが甘く、頸部から外反し、口縁部で内湾する。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は横位のハケ、その後に斜位のハケ、内面は斜位のケズリを施している。320は胴部は肩が張っており、頸部は締まりが甘い。口縁部はゆるやかに内湾し、端部には1条のくぼみがある。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は横位のハケ後に縦位のハケ、胴部内面は、下方がケズリ、その上はナデ後に指頭圧痕である。321は口縁部はやや内湾気味で外側に開き、器壁が最も厚くできている。胴部は肩が張っている。外面は、口縁部から頸部は横位のナデ、胴部は横位のハケ後横位のナデである。内面は、口縁部は横位のナデ、胴部はケズリである。322は胴部最大径が胴部中位に位置する。頸部は締まりが甘く、口縁部は内湾し端部で丸くおさめている。口縁部は内・外面、胴部外面は横位のナデ、胴部内面はケズリである。323は接合により口縁部は半分、胴部は完形にまで復元できた。口縁部は残った部分から推測すると短くて外反したもののが付くだろう。頸部は締まりが甘く、胴部は肩が張っており、底部は丸底を呈す。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、胴部外面は横位のナデ後に縦位のハケをして、ナデで整形している。胴部内面は中位がハラケズリ後ナデで、上位と底部には指頭圧痕が明瞭に残る。第107図は中型壺の口縁部から胴部中位までの破片資料である。324は口縁部は口唇部で若干内湾する。外面は、口縁部が横位のハケ後横位のナデ、胴部が横位のナデ、内面は、口縁部が横位のナデ、頸部が横位のナデ後に指頭圧痕、胴部がケズリである。325は胴部はかなり肩が張る可能性が高い。頸部は締まりが甘く、口縁部は若干外反しており、端部は丸くおさめている。口縁部は内・外面ともに横位のハケ後に丁寧な横位のナデで整えている。胴部外面は横位のナデ、胴部内面は頸部のすぐ下が指頭圧痕、その下がケズリである。326は口縁部はやや内湾、口唇部は直立している。外面は横位のハケ後に縦位のナデ、口縁部が横位のナデである。内面は口縁部が横位のハケ・横位のナデで、胴部はケズリを施している。327は口縁部はやや内湾している。胴部上位までしかないがおそらく肩は張る感じになるだろう。口縁部は内・外面ともに横位のハケ後横位のナデ、胴部外面は縦位のハケ後に横位のナデを施している。内面は頸部が指頭圧痕、胴部はケズリで厚さ2mmという薄さまで削って



第106図 方形環溝出土土器（発③）（1/3）

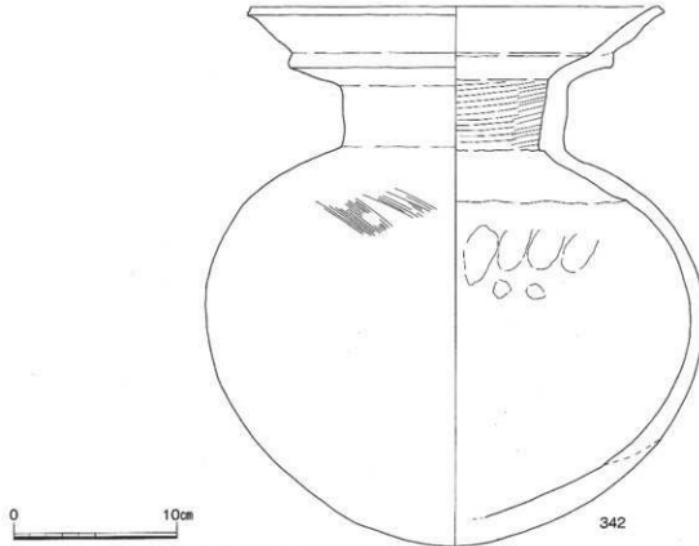
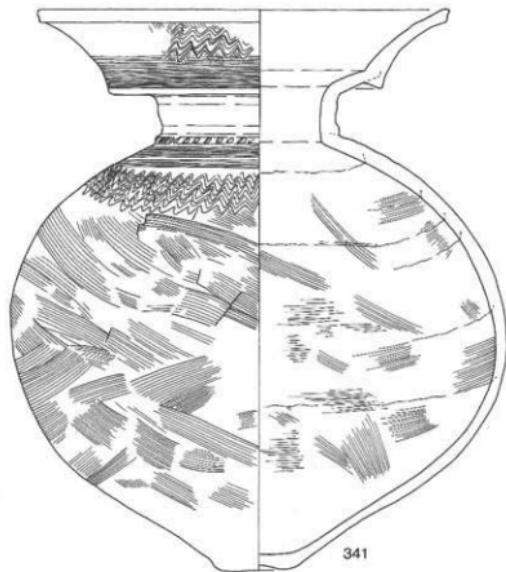
いる。328は口縁部は内湾しており、頸部は締まっている。胴部はなで肩である。口縁部は内・外ともに横位のナデ、胴部外面は横位のナデ後に縦位のハケを施している。胴部内面は横位のケズリを行っている。329は口縁部が水平に開いており、口唇部内側に若干くぼみが見られる。口縁部と外面はナデ、内面は斜位のケズリを施している。330は口縁部中央が肥厚しながら内湾しており、口唇部端は外方につまみ出している。口縁部は内・外ともに横位のナデ、胴部外面はナデ、胴部内面は斜位のケズリと頸部直下に指頭圧痕が明瞭に残っている。331は小さめの甕の口縁部から胴部上位である。頸部は締まりが悪く、口縁部は若干内湾している。内・外ともに横位のナデを施している。332は頸部は締まっており、口縁部は「く」の字状に外反して上方で内湾する。内・外ともに横位のナデを施している。333は胴部中位から底部は欠損している。胴部は肩が張っており、頸部は締まりが甘い。口縁部は若干内湾している。胴部内面に口縁部から手を入れて4本の指で土器を持ち上げたような並んだ指頭圧痕が明瞭に残っている。他は横位のナデを施している。334は胴部が細く、頸部は締まっていない。胴部最大径が口径より狭くなりそうである。口縁部は内湾し、端部は断面方形を呈す。口縁部内・外面、胴部外面は丁寧な横位のナデである。胴部内面はケズリを施している。335は頸部がよく締まっており、胴部と口縁部を接合した痕跡が明瞭に残る。口縁部は内・外ともに横位のナデ、胴部外面は横位のナデ、内面は横位のケズリである。336はなで肩で、頸部は若干締まりが悪い。口縁部はゆるやかに内湾しており、端部は断面方形を呈す。口縁部内・外面、胴部上位外面は横位のナデである。胴部内面は横位のケズリを施している。337は頸部が若干直立しており、口縁部が内湾し、上方でやや外反している。口縁部と頸部は内・外ともに丁寧な横位のナデである。外面はナデ、内面はケズリである。胎土に金雲母が多量に含まれている。338は口縁部がほぼ直立に近く、胴部は九くなる。外面は、口縁部が横位のハケ後に横位のナデ、胴部が縦位のハケ後ナデ、内面は口縁部が横位のハケ後に横位のナデで、胴部はケズリである。339は胴部がなで肩で、頸部は締まりが若干悪い。口縁部は若干内湾し、口唇部は断面方形で、きれいに面取りされた後、中央に1条のくぼみを作っている。口縁部内・外面、胴部外面は横位のナデ、胴部内面はケズリである。340は口縁部は若干内湾し、口唇部が内側に少しだけ立ち上がる。口縁部と頸部外面は横位のハケ後横位のナデ、口唇部は横位のナデで整えて、上から1条の沈線を施している。口縁部内面は横位のハケ・斜位のハケでその後にナデを施している。胴部外面は上位が縦位のナデである。胴部内面は、胴部上位はケズリで、厚さ2.5mmとかなりの薄さに仕上げている。

79頁第94図から89頁第99図までは庄内系、90頁第100図から101頁第107図までは布留系の甕と考える。内・外ともにハケ調整を施しており、外面にタキ縮めを行っているものを庄内系、内面にケズリ調整を行っているものを布留系として大まかに分けている。島原半島には雲仙岳の噴火に伴い角閃石安山岩ばかりで、金雲母は全くといっていいほど見られないため、角閃石を多量に含んでいるものは在地で作っていると言っても過言ではない。庄内系はほとんどが器壁は厚く、胎土に角閃石が多量に含まれており在地系に庄内系が影響を与え、部分的に模倣していることが考えられる。布留系になってくると胎土に金雲母を含む搬入品と考えられる甕が増えてくる。搬入品と考えられるものはいずれも、内面ケズリ調整により器壁を非常に薄く仕上げるもの、外面に沈線を施すものや、器面がきれいに精製されており作りが丁寧である。その中で内面ケズリ調整を行っているにも関わらず器壁が厚いものがあり、それらは胎土に角閃石を含んでいるため庄内系と同じく、在地系に布留系が影響を与えていていると考えられる。



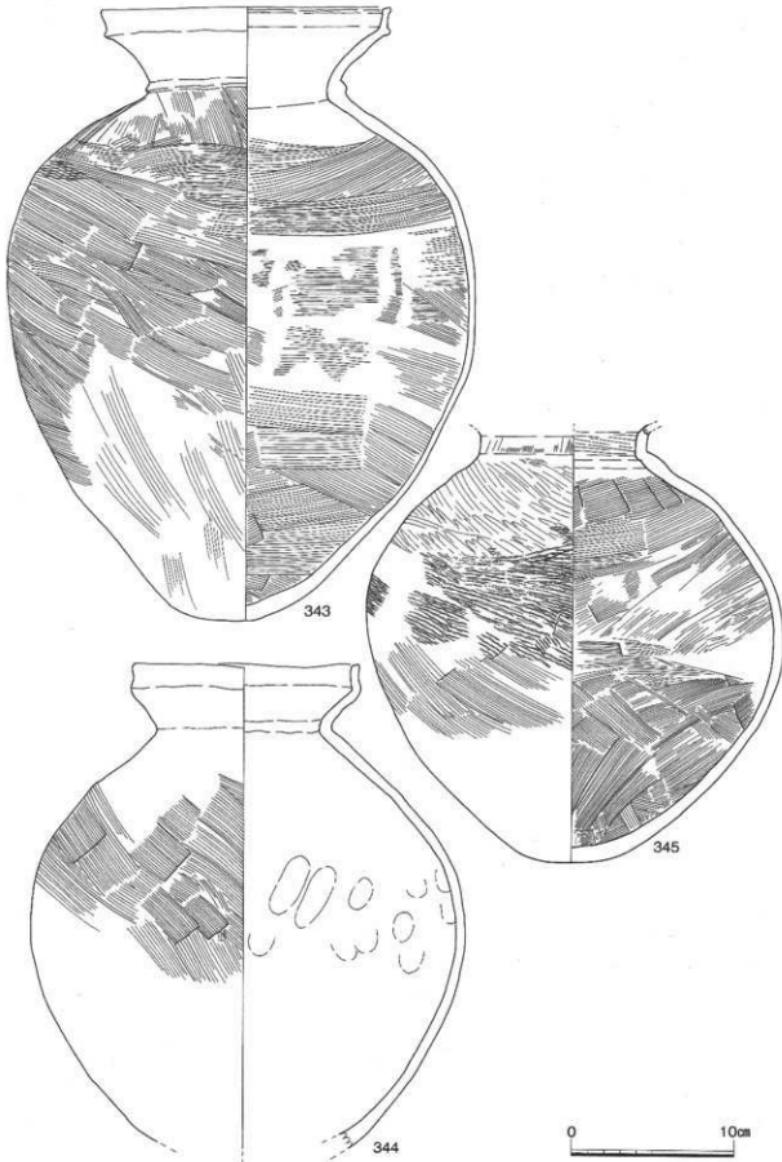
第107図 方形環溝出土土器（斐④）(1/3)

壺（第108図～第117図、図版21～22）：第108図は畿内系の中型二重口縁壺である。どちらも残りが非常によく、接合によりほぼ完形にまで復元できた。341は残存率90%。胎土に金雲母、雲母粒子を多く含んでいるため搬入品だろうか。底部は安定のよい小さい平底で中央部分がくぼむ凹型を呈しており輪台を使って底部の作成を行った可能性が高いことが考えられる。胴部は上半部に膨らみを持つ。頸部は短く直立しており、中央に若干の膨らみを持つ。口縁部は1次口縁が山型にやや外反しており、2次口縁は斜め上に外反しながら長く伸びている。胸部外面は頸部と胴部の基部には細い刻み目がある突帯が貼り付けられ、上位は口縁部と同様に横位のナデ後に横位の櫛書き、その下に波状文を施している。中位から下は横位のナデ後斜位のハケで、頸部外面は横位のハケ後横位のナデを施している。1次口縁は横位のナデ、2次口縁は斜位のハケ、段の部分に模様をイメージしたであろう横位の櫛書きがしっかりと強い線で施され、その後、櫛書きの上部分に複数の波状文を施している。内面は横位のナデ後不定方向へのハケを施しているが、器面が部分的に剥落しており判然としない。まず鉢を作り、その上に粘土を帶状に輪積みにして二重口縁壺を作りあげたのではないかと思われる粘土帶の痕跡が内・外面ともに明瞭に残り、作成課程が非常によく観察できた。口縁部から頸部は横位のナデである。342は残存率90%。胎土に含まれる粒子が細かく尚且つ微量で、非常によく精製されていることが見た目でよく分かる。金雲母や雲母粒子が含まれるため、341と同様に搬入品だろうか。焼成は良好で硬く、しっかりと焼けている。底部は丸底を呈す。胴部最大径を中位より若干上に位置しているが、341とは逆に下半部の膨らみが強い。頸部は長く直立しており、1次口縁、2次口縁ともに角度を異にして斜め上方に伸びる。口唇部端は断面方形で、外方につまみ出している。底部はケズリの後ミガキを施している。胴部外面は肩部分に若干斜位のハケの痕跡があるがきれいにナデ消し、全体的にミガキをかけて仕上げている。胴部内面は上位にナデ・指頭圧痕が明瞭に残る。頸部外面はケズリ後に中央のみ横位のナデ、頸部と胴部の接合面は縦位のナデできれいにしている。口縁部外面はケズリ後に横位のナデで整形し、内面は横位のナデである。全体に丹塗りの痕跡が残っている。第109図は山陰系の中型二重口縁壺である。こちらも畿内系と同様に非常に残りがよく、接合により完形近くまで復元することができた。343は残存率90%。底部に向かってスリムになり、尖り気味の丸底である。胴部は肩が非常に張っている。頸部は短く、縮まりがよい。頸部と胴部の基部には1本の三角突帯が巡っている。この突帯から肥後系である可能性が高いと考えられる。1次口縁が斜め上に外反しながら伸び、その上に直立した短い2次口縁が付く。口唇部端は内側に斜めに切れており、外側につまみ出している。口縁部から頸部は横位のナデで整えている。胴部外面は上位には縦位のハケ、肩部分から下は横位のハケ、底部付近は縦位のハケである。内面調整は器壁の剥落により観察は難しいが、底部から頸部に向かって反時計周りで横位のハケが施されているようだ。344は残存率60%。底部は欠損しているがおそらく丸底になるだろう。胴部中央が非常に膨らんでおり、肩はなで肩である。頸部は短く、縮まりがよい。1次口縁が斜め上に伸びており、その上にほぼ直立した2次口縁が付く。全体的に器壁が厚い。口縁部は内・外面ともに横位のナデである。胴部外面は上位が斜位のハケである。本来全面的にハケを施していたのであろうが、ナデで分からなくなっている。内面は胴部最大径付近に指頭圧痕が明瞭に残っている。他はナデを施している。345は残存率80%。底部は丸底に近い平底で、胴部の最大径は中位より若干上に位置しており上位に膨らみがある。頸部は短く直立しており、縮まりがよい。口縁部は全周するように失われておらず、故意に打ち欠いた可能性が高い。頸部外面は若干消えかけているが縦位のハケ、胴部外面は上位にはヘラミガキを施しており、頸部直下は若干斜位で、その下は斜位方向に行っている。中位にはタタキを施していた様だが、下からの強い斜位のハケによりよく分からなくなっている。下位は縦位のケズリを行った後に縦位のナデを施し

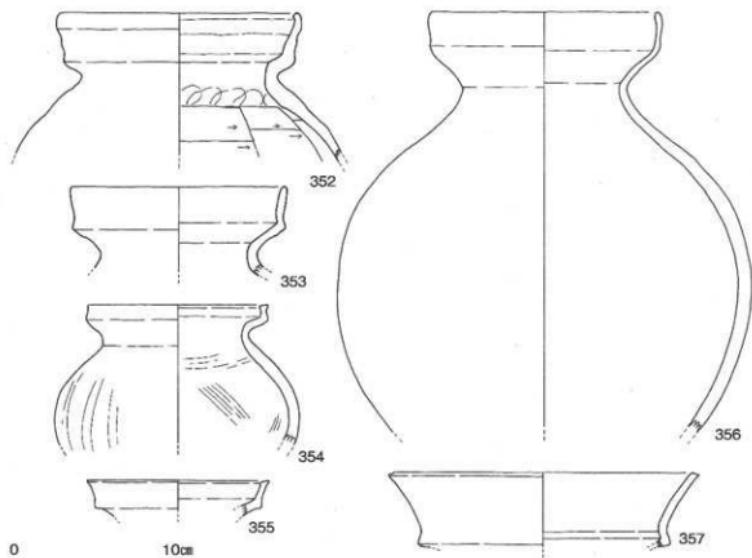
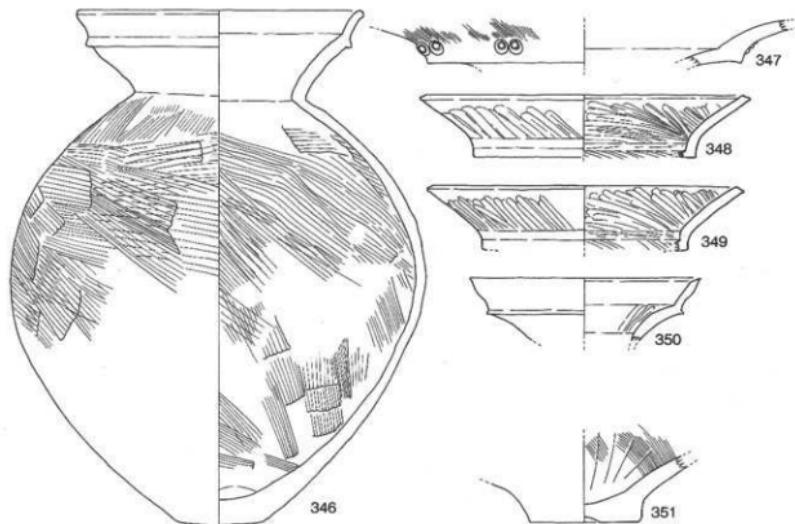


第108図 方形環溝出土土器（壺①縦内系二重口縁）(1/3)

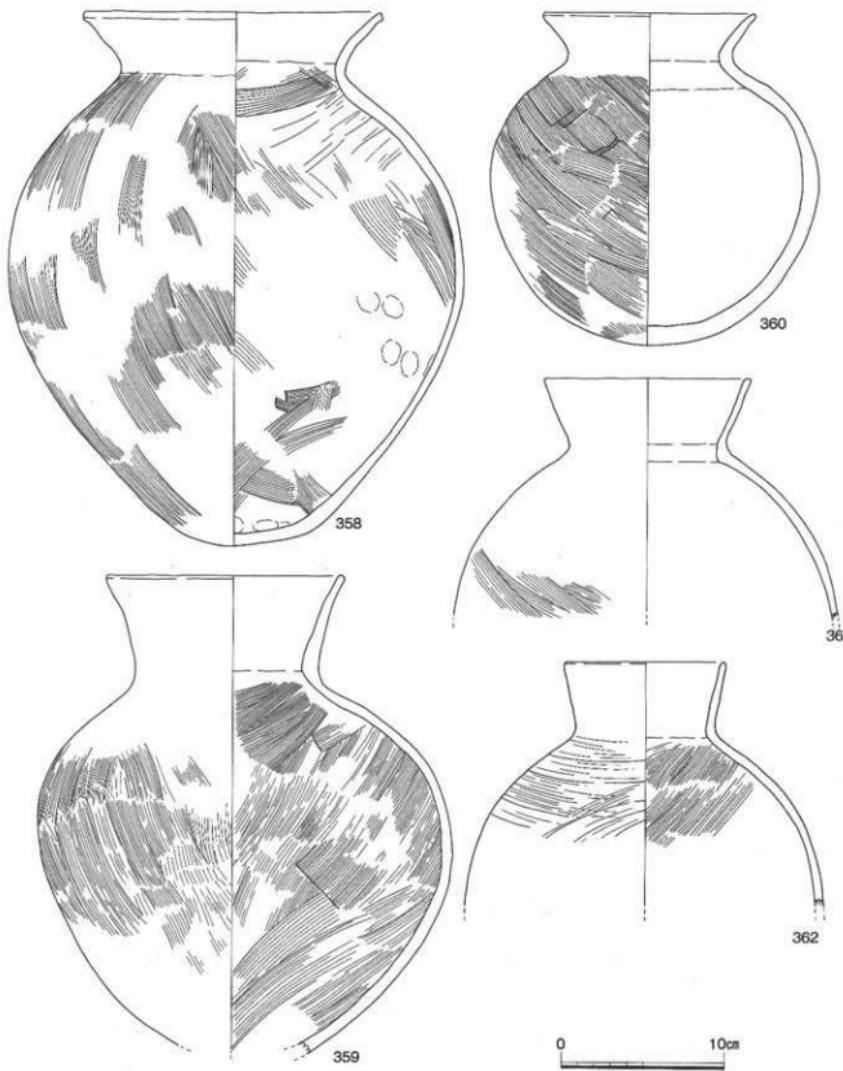
ている。胴部内面は頸部が横位のハケ、上位から下は斜位のハケ、底部は縦位のハケである。第110図は外來系の中型・小型二重口縁壺の破片資料である。346は接合によりほぼ完形にまで復元できた。残存率95%。底部は平底で非常にぶ厚くなっている。胴部最大径は中位に位置しており、頸部は縮まりが非常によい。1次口縁は外反しだしく外側に開き、その上に若干外反する短い2次口縁が付く。1次口縁と2次口縁の繋ぎ目には外側に三角につまみだした突帯がある。口唇部端は、外方に向かって丸くおさめている。口縁部は内・外面ともに丁寧な横位のナデで整えている。胴部外面は上位が縦位のハケ、その下に横位と斜位のハケが乱雜に施されている。内面は底部から口縁部に向かっての縦位と斜位のハケ、底部には指頭圧痕が明晰に残る。347は口縁部の破片資料である。口唇部端をわずかに欠損している。1次口縁はほぼ水平で、2次口縁は外反している。2次口縁には2個を1単位とした竹管文を施した円形浮文を、3.5cm間隔で貼り付けている。外面は全体的に横位のナデを行い、施文の上には斜位のハケを施す。内面も横位のナデを施した後に、きれいにミガキを施している。若干干塗りの痕跡も残っているようである。348は1次口縁がほぼ水平をなし、2次口縁は外反している。口唇部は断面方形で、端部で外方につまみだしている。内・外面ともにきれいにミガキを施している。349は1次口縁はほぼ水平を呈し2次口縁は外反しており、大きく外側に開いている。口唇部は断面方形で、外方につまみ出している。348と同様の形状である。外面は口縁部上部が横位のハケ後ナデ、中部がケズリ後ミガキ、段の部分が横位のハケ後横位のナデを施している。内面は口縁部がケズリ後ミガキ、段部分が斜位のハケ後にナデである。350は頸部が残っていないが、細く346のように縮まりがよく、似たような形状を成すだろう。1次口縁は外反しており、2次口縁は中央が肥厚しながら外反する。口唇部端は先が尖っており、内側に斜めに切れている。外面は丁寧な横位のナデ、内面は上の段が横位のナデ、下の段が縦位のケズリ後に上からミガキを施し暗文に仕上げている。硬く焼きあがっていたのだろうが、外面は剥落してしまっている。351はおそらく二重口縁壺の底部片であろう。底部は平底。中央部分にくぼみがある凹型のため輪台を使い作成されたものであろうか。341の底部と似ており、同じくらいかもしくはもう少しきめの二重口縁壺になることが予想される。外面は底面がケズリ、胴部下位がハケを施している。内面は蜘蛛の巣状のケズリ、その上から斜位のハケを施している。352は肩が張っており、頸部は縮まりが甘い。1次口縁は短く外反しており、2次口縁は波打ちながら直立する。口唇部端は内側に丸くおさめる。胴部外面はナデ、胴部内面は横位のケズリであるが器壁は厚い。353は頸部が短く縮まりが甘く、1次口縁は外反し、その上に直立する2次口縁が付く。外面は2次口縁が横位のハケ後横位のナデ、中位がミガキで暗文に、1次口縁は横位のハケ後横位のナデである。内面は2次口縁が横位のハケ後横位のナデ、その下がミガキ、1次口縁部分がミガキである。354はおそらく近江系の壺と思われる。口縁部から胴部中位までが残存している。底部は欠損しており不明。胴部は中位が膨らみ丸くなっている。頸部は縮まりが甘い。1次口縁は短く外反しており、2次口縁は、短く直立したもののが付く。口縁端部はきれいに面取りをしている。器壁が非常に厚い。口縁部から胴部上位は内・外面ともに横位のナデを施している。胴部外面は横位のナデ後に2本ずつ縦位のハケが入っており、赤色顔料の痕跡も認められる。内面は上位に横位のハケ、その下に斜位の太めのハケを施している。355は口縁部片であるが破片資料のため不明な点が多い。外反する1次口縁の上に、直立する2次口縁が付く。356は口縁部から胴部下位までが残存していた。焼成はあまりよくない。胴部は球形。1次口縁はやや外反しており、2次口縁は短く直立気味だが上方に若干内向きになる。口唇部端は肥厚しており、丸くおさめる。内・外面ともに器面が剥落しており調整は判然としない。357は口縁部の2次口縁がやや外反し外側に開いている。口唇部端には1条のくぼみがある。内・外面ともにナデ調整だが、器面が磨耗しており判然としない。



第109図 方形環溝出土土器（壺②山陰系二重口縁）(1/3)



第110図 方形環溝出土土器（壺③二重口縁）（1/3）



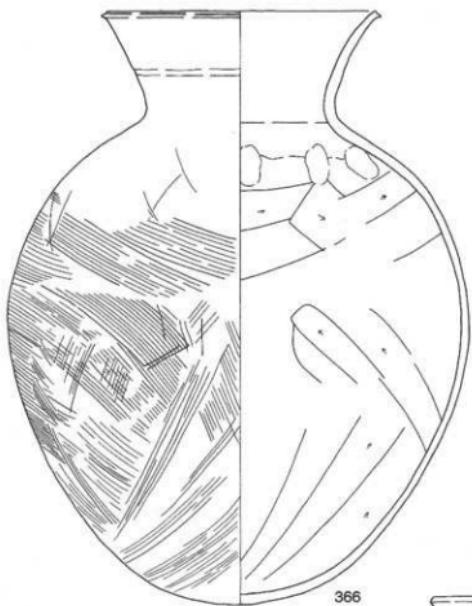
第111図 方形環溝出土土器（壺④広口壺）（1/3）



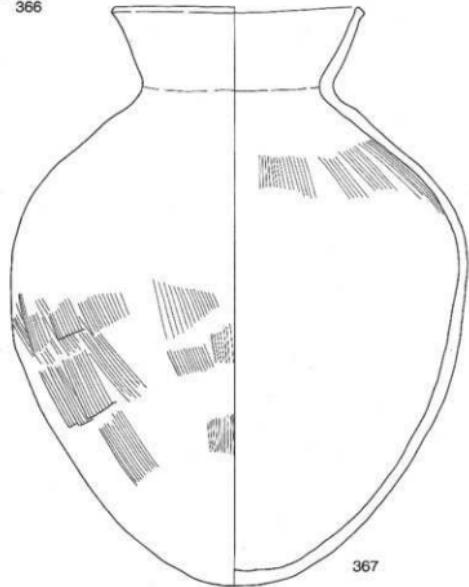
第112図 方形環溝出土土器（壺⑤広口壺）（1/3）

広口壺(第111図～第114図)：358は残存率約50%。底部は平底を呈している。胴部中位に張りを持ち、頸部は締まりがよい。口縁部は短く「く」の字状に外反しており、口唇部端はきれいに面取りされている。口縁部は丁寧なナデで整え仕上げている。胴部外面は縦位のハケを施している。内面は上半部が斜位のハケ、中位辺りが指頭圧痕、下半部は回転を利用した横位のハケ、底部は指頭圧痕が明瞭に残る。359は壺の口縁部から胴部下位までが残存している。肩の張る形状を呈し、頸部は締まりが甘い。口縁部は長く若干外反しており、口唇部端は丸くおさめている。頸部の器壁が一番厚い。口縁部はハケの後丁寧にナデを施している。胴部は内外面ともに縦位のハケであるが、外面の肩の部分はナデによるものが調整痕が見えなくなっている。360は残存率95%。底部は丸底で、胴部は球形である。頸

部は縦まりがやや甘い。口縁部は短く外反しており、口唇部端は丸くおさめている。口縁部から頸部外面は横位ハケ後ナデ、胴部外面は縦位ハケを施す。非常に器壁が厚く、小さい割にかなりの重さがある。361は胴部が丸く、最大径が中位に位置する。口縁部はほぼ直立しており、口唇部端は丸くおさめている。全面的に器面が剥落しており判然としないが、胴部中位外面は斜位のハケが若干残る。362は361と同じく肩を呈す。頸部は縦まりがよい。口縁部は長く直立しており、口唇部端は丸くおさめている。口縁部は丁寧な横位のナデである。胴部外面は横位・斜位のハケ後に横位のナデ、内面は斜位のハケ後にナデを施している。残存率60%程の資料である。363は底部が平底に近い丸底を呈す。胴部は肩が非常に張っており、全体的にすんぐりとした形状である。頸部は縦まりがやや甘い。口縁部は若干外反しており、短い。口唇部端は先を尖らせている。口縁部は横位のナデ、胴部外面は縦位のハケ、底部がナデである。内面は斜位のハケ、底部に指頭圧痕が残る。364は底部が丸底を呈す。胴部は363ほどではないが肩が非常に張っている。頸部は縦まりがよく、口縁部は波打ちながら外反している。口唇部で肥厚し、端部は丸くおさめる。口縁部は横位のナデで丁寧に仕上げている。胴部外面は底部から口縁部に向かって縦位・斜位のハケを施している。内面は斜位のハケであるが部分的にナデ消されている。365は底部が丸底を呈す。胴部は肩が張っており、頸部は縦まりがよい。口縁部は短くやや外反している。口唇部端はきれいに面取りをして外側に斜めに切れている。口縁部は横位のナデ、胴部外面は上位が横位のナデで、下位は縦位のハケである。内面は非常に強調した縦位のハケである。366は残存率80%。底部は丸底を呈し、胴部は長胴で寸胴である。最大径は上位に位置しており、肩が張っている。頸部は縦まりが甘い。口縁部は長く外反しており、口唇部端は外側に斜めに切れている。外面の頸部から胴部下位にかけてしっかりと線刻が残っている。口縁部と頸部、胴部上位の外面は横位のナデ、口縁部内面は横位のハケ後に横位のナデを施している。胴部外面は中位に横位のハケ・横位のナデ、底部付近は縦位のハケを、胴部内面は上位にかなり強く指頭圧痕が残り、それより下はケズリである。367は接合によりほぼ完形にまで復元できた。底部は丸底を呈す。胴部は肩が張っている。口縁部は短く直立である。口唇部端は366と同じく外側に斜めに切れている。口縁部は内・外面ともに横位のナデを施している。胴部外面は器壁の劣化が目立つため下方に施された縦位のハケのみ確認できた。内面は肩部に縦位のハケが残る。本来全面にハケが施されていたと思われるが、ナデあるいは摩滅によりハケは消えたと考える。また底部には指頭圧痕が確認できる。第114図は大型の広口壺で、368と369、370と371は同一個体と考えられる。368と369は、底部は平底を呈す。胴部はなで肩で下腹、頸部は縦まりがよい。口縁部は長く立ち気味に外反し、若干朝顔状に水平に開いている。口唇部端は断面方形で、外側につまみ出している。調整は口縁部外面が横位のナデ後に縦位のハケ、内面は横位のナデである。胴部外面は頸部直下に横位のハケ後縦位のハケ、その下に斜位のハケを施し、内面は頸部直下に縦位のハケ、その下に横位のハケを施している。底部は内・外面ともに底部から上に向かって縦位のハケ、内面には指頭圧痕も明瞭に残る。370と371も同様に底部は平底を呈す。なで肩で、頸部は縦まりがやや甘い。口縁部は長く、上方で外反している。こちらも同様に朝顔状に水平に開く端部には1条のくぼみがある。調整は口縁部外面が斜位のハケ後に丁寧な横位のナデ、内面は横位・斜位のハケ後に外反している部分のみ横位のナデを行っている。胴部外面は頸部直下に縦位のハケ、肩部に斜位のハケを施している。口縁部と胴部を接合した痕跡が明瞭に残り、接合した後ナデやヘラなどで接合痕を消している。底部外面は縦位のハケ後にナデ、部分的にナデ消し。底部内面は横位のナデ、胴部下位は斜位の太いハケを施している。第115図は壺もしくは壺の口縁部・胴部破片資料である。372は口縁部は中心の器壁が厚くなってしまっており、若干内湾している。外面は口縁部が斜位方向にハケと横位のナデを施す。頸部は横位のハケ、胴部は横位のナデである。



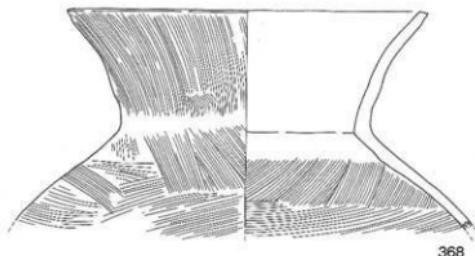
366



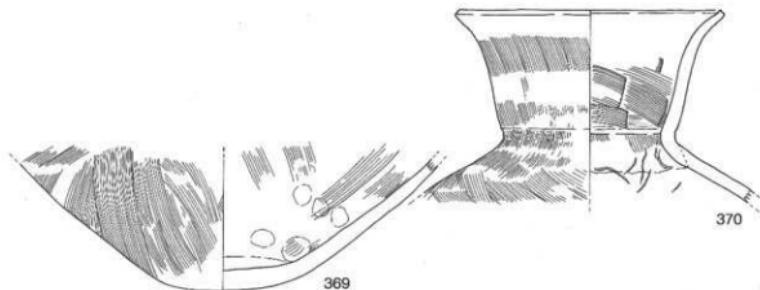
367



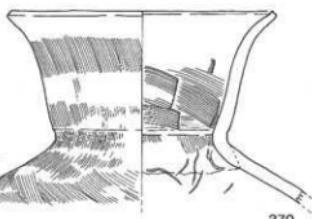
第113図 方形環溝出土土器（壺⑥広口壺）(1/3)



368



369



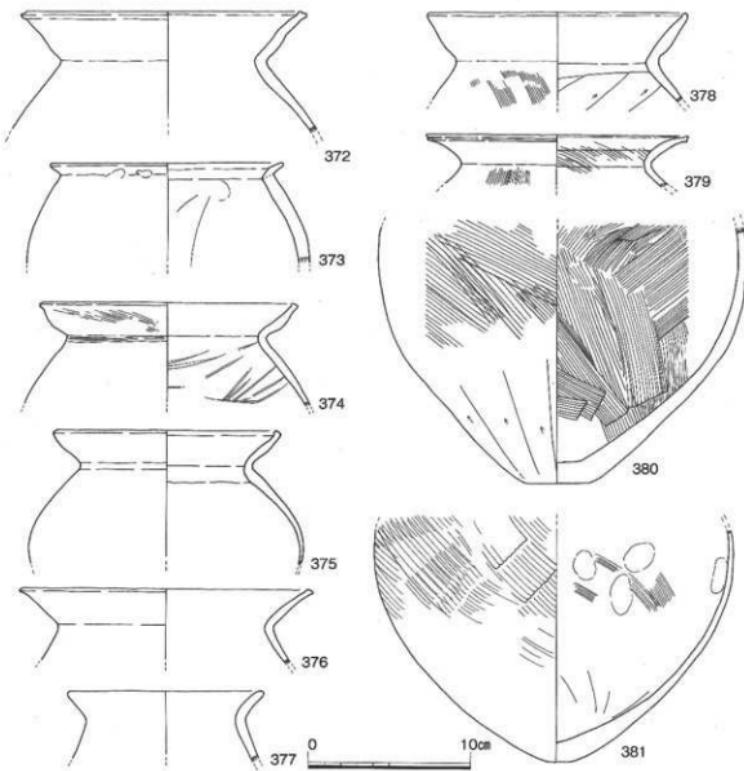
370



371

第114図 方形環溝出土土器（壹⑦広口壺）(1/3)

内面は、口縁部・頸部が横位のナデ、胴部がヘラケズリである。373は口縁部が非常に短く、頸部は縮まりがよく、内面には稜線が残る。胴部は中位までしか残っていないが丸く、下半部が膨らむ形状になると考えられる。口縁部は内・外面ともに横位のナデ、外面には指頭圧痕が残る。胴部外面はナデ、胴部内面は頸部が横位のナデ、その下が縱位のケズリ後縱位のナデである。374は口縁部は中心の器壁が厚くなっている。外面は口縁部が斜位方向にハケと横位のナデを施す。頸部は横位のハケ、胴部は横位のナデである。内面は、口縁部・頸部が横位のナデ、胴部がヘラケズリである。375は小型の壺である。胴部中位から底部は欠損している。胴部はナデ肩で中位が非常に張っており、頸部は縮まりが甘い。口縁部は短く、内湾している。全面的に器壁が剥落しており不明。376は頸部から口縁部は「く」の字状に外反している。器面が剥落しており詳しい調整は不明である。377は小片の為詳しくは判然としない。頸部から口縁部に向かって「く」の字に外反している。内・



第115図 方形環溝出土土器(壺・壺⑧)(1/3)

外面ともに横位のナデを施している。378は口縁部は、中心辺りの器壁が厚くなってしまっており、あまり外側には開いていない。口唇部端はまるくおさめる。口縁部外面が横位のナデ、口縁部から頸部が横位のナデ。頸部外面が横位のハケ後に横位のナデ、胴部外面が縦位のハケ後に横位のナデである。胴部内面はヘラケズリを施している。379は口縁部は非常に外反し、外側に開き、朝顔状を呈し、水平になっている。口唇部は少し立ち上がり、一本の沈線が見られる。外面は口縁部が横位のハケ後縦位のナデ、胴部が縦位のハケ後に縦位のナデである。内面は口縁部が斜位のハケ後縦位のナデ、胴部は横位のナデを施している。380は胴部のみが残存している。かなり大きめの壺で底部は平底である。胴部中位に最大径があるものと思われる。外面は胴部が縦位のナデ後縦位のハケ、底部がケズリ後ナデである。内面は不定方向への強調したハケである。381は380と同じく胴部のみが残存している。胴部最大径は21.8cmを測り、中位に位置する。底部は尖り気味の丸底を呈している。胴部外面は横位のナデ後、胴部中位付近に斜位のハケを施している。内面は底部からケズリを行った後縦位のハケ、その後に指頭圧痕を施している。第116図はおそらく壺の胴部片である。382は底部は丸底、胴部最大径は中位よりも若干上に位置する。中央部が張っており丸みを帯びたひし形のような形状である。口縁部は欠損しているので判然としないが、若干外反して直立する長めのものが付くと思われる。胴部外面は斜位のハ